



2020年1月 No.160

ものごとを平和的に解決する
子どもたちを育てるために
～ 3つの視点による平和教育実践集 ～



静岡県教職員組合立教育研究所
国際連帯と平和教育研究委員会

「平和教育と国際連帯の教育」



共同研究者 伊藤 恭彦（名古屋市立大学）

1 もう一つの平和教育と反戦教育

静岡県教職員組合立教育研究所では「いつでも、どこでも、だれでもできる平和教育」を平和教育の柱として研究活動を進め、実践を積み重ねてきました。かつて平和教育は反戦教育を意味していました。第二次世界大戦の真剣な反省の上に立ち、子どもたちに戦争の悲惨さを教え、戦争を起こさない子どもたちを育てることが、反戦教育の目的だったのです。戦前世代や戦中世代の教師が教育現場の中核を担い、平和教育はリアリティをもった反戦教育として展開しました。戦後日本が様々な問題をかかえながらも、平和で民主的な社会として持続してきた理由の一つは、このような先輩教員の実践に求めることができます。

しかしながら、現在、教壇に立つ教員はすべて戦後生まれになりました。戦争についてリアリティをもって語ることができない世代が教育の中心にいます。さらに現実世界では、戦争の質も変化しています。かつてのような侵略戦争対防衛戦争という白黒はっきりした戦争はほとんどありません。対テロ戦争に代表される白黒はっきりしない戦争が急速に増加しています。もちろん、戦争はひとたび起これば、白黒問わず残酷な殺し合いです。こうした状況を踏まえて、私たちはもう一つの平和教育、すなわち、「いつでも、どこでも、だれでもできる平和教育」を推進してきました。それは次のような教育です。人間は多元的な価値観をもち多様な利害をもつがゆえに、必ず対立し争いを起こします。対立と争いが人間社会において避けがたいとすれば、それらを戦争など暴力によって解決するのではなく、平和的に解決することが必要になります。私たちが進めている平和教育は「争いごとを平和的に解決する力をもった子どもたちを育てる」教育なのです。

平和的に争いごとを解決する力を、私たちは「①他者の立場に立って聞くことができる、②他者の立場を尊重して、自分の考えや思いを伝えることができる、③多面的なものの見方や考え方ができる」という形で2017年度の研究を通して定式化しました。もちろん、この定式化は完成型ではありません。これからの研究と実践を通して深められ修正されていくものです。

言うまでもなく、もう一つの平和教育は先に述べた反戦教育を否定するものではありません。戦争の悲惨さを感じ考える教育は、他者の苦しみを感じたり暴力では決して問題が解決しないことを理解したりする上でとても大切です。特にゲームなどでヴァーチャル・ウォーに親しんでいる子どもたちに、戦争の悲惨さを伝えることは急務と言えるかもしれません。ここで強調したいことは、戦争の悲惨さを理解することが、平和的に問題を解決する力と結びつけることが重要だということです。その意味で反戦教育ともう一つの平和教育は車の両輪だと言えます。

2 平和教育と国際連帯の教育

今回の研究活動と実践では国際連帯の教育の再定義とそれに従った新しい実践を進めました。かつて研究所では国際連帯を、静岡県で増加する外国籍児童・生徒が抱える困難さの解決や日本人の児童・生徒との共生をめざす実践と位置づけていました。この実践の意義は依然として高いのですが、研究所では外国籍児童・生徒の問題をより広い地球的文脈で考え始めました。

それは地球規模の問題（地球的問題群）を平和教育の中に取り込むことです。現在の地球には一国だけでは解決できないが、解決に失敗すると人類が滅亡する深刻な問題があります。地球環境問題、大量破壊兵器の蓄積と拡散、世界経済の不安定化、資源枯渇などがその典型だと言えます。国境を越える人の移動も地球規模問題の中に含まれます。外国籍児童・生徒の問題もグローバルな問題の中で捉え、子どもたちと考え、解決する力を養うことが大切なのです。

今年度、人の移動を含む地球規模の問題を考え、その解決のために行動する力を涵養する教育を国際連帯の教育として再定義しました。この国際連帯の教育は平和教育とも強い結びつきがあります。まず地球規模問題が、世界的な対立と紛争の温床になっている点です。資源争奪戦や貧困を背景としたテロ活動は戦争の直接的な原因です。戦争をなくするためには地球規模問題の解決が不可避です。地球規模問題を学習することは、戦争の原因を根本から考え、その解決策を探ることに結びついています。

さらに地球規模の問題を中心にすえた国際連帯の教育では、相手（特に国境の向こう側にいる他者）の立場にたつことが求められます。たとえば海外で生産された安価の衣類を手にする富裕国の私たちと劣悪な生産現場で衣類をつくっている子どもたち、私たちはこの非対称な世界を通じて世界の問題を考えなくてはなりません。これは相手の立場にたって考える態度を養います。そして、そのことは平和的に問題を解決する力につながるのです。

国際連帯の教育は国際理解教育に似ています。両者は排他的な関係にあるわけではありません。国際連帯の教育は平和的に問題を解決する力の育成に力点をおいている点が異なります。国際連帯の教育と国際理解教育は、子どもたちが地球市民として育つために必要なのです。

3 SDGs と平和教育

現在、日本や世界ではSDGsへの関心が急速に高まり、その実践も広がっています。SDGsとはSustainable Development Goalsの略称で、日本では「持続可能な開発目標」と訳されています。この目標は2015年に国連総会で採択された地球を持続可能にするための17目標（その下位169ターゲット）です。目標は地球が直面している貧困、格差、健康、ジェンダー不平等、地球環境問題、生産と労働に関連する問題などを解決することを目指しています。この目標に賛同する個人や組織は、自らの活動を積極的にSDGsに関連づけ自由に発信していくことができます。

SDGsは時として新しい環境目標だとか成長戦略だとか誤解されています。もちろん、そうした側面はあります。しかし、SDGsを正しく理解するためには、SDGsが2000年に

国連で採択された MDGs（ミレニアム開発目標）の後継目標だということを踏まえなくてはなりません。MDGs は「世界の貧困者を半減させる」といった主として途上国支援の目標でした。これが 2015 年に終わり、その後継として貧困だけでなく世界を持続不可能にさせている問題群を先進国も含めて解決していくために SDGs が採択されたのです。ですから SDGs が根底においている価値が「誰一人とりのこさない」なのです。SDGs は環境目標を含んでいますが、それにとどまらない広い社会目標です。SDGs はイノベーションと経済成長を不可避としていますが、それだけでは解決できない、私たちの価値観の変容と社会の価値の転換を求めるものです。

SDGs は先に紹介した地球規模問題の解決をめざすものです。全国の教育現場では SDGs を掲げた教育や実践がすすんでいます。地球規模問題の解決が平和な地球社会を形成するだけでなく、その学習が平和的に問題を解決する力を子どもたちに育むと考えられるので国際連帯の教育・平和教育と SDGs は親和的と言えます。その意味で平和教育の一環として SDGs が学校現場に広がることは望ましいことです。そして SDGs との関係を意識した平和教育は平和教育の幅を拡げるでしょう。

世界的な対立が激化しています。日本社会でも暴力が根絶されていません。むしろ子どもたちなど弱い人に対する暴力が拡大しています。また地球温暖化に代表される気候変動は待ったなしの状態ですが、グローバルな解決に背を向ける指導者もいます。こうした先行き不透明な時代を生き抜く子どもたちには、何としても争いごとを平和的に解決する力が必要です。

この所報には所員の皆さんが実践した魅力的で創造的な平和教育の授業が掲載されています。所員の皆さんの実践に目を通していただき、平和教育、国際連帯の教育、SDGs への関心を高めていただきたいと思います。



二度と戦争をしない子どもを育てる ～小学校低学年からの反戦平和教育～

終戦から 74 年が過ぎた今、戦争を知る人はどんどんと少なくなっています。日本に住んでいる私たちは、平和が普通で当たり前になりました。しかし、国際社会に目を向けると、部族・民族や宗教間での争いや戦争が歴史上に存在し、現在でも紛争が続いている地域があります。私たちの住む日本でも、二度と戦争をしないために小学校低学年のうちから反戦平和教育を実践する必要があると感じました。低学年の子どもでも、題材を工夫することで戦争を身近にすることができるはずです。本単元では、子どもたちが住んでいる河津町の戦時中の様子や戦時中の食べ物を知ることにより、戦争があるとつらい、悲しいということに気付かせたいと考えました。

◇ 授業の具体

第 1 学年 1 組 学級活動学習指導案

指導者 小菅 知章（河津町立南小学校）

1 題材名 「戦時中の食事」～わたしたち河津町で食べられていたもの～

2 題材設定の理由

（1）児童について

現代の小学 1 年生が戦争をどこまで知っているのか事前にアンケートをとった。戦争という言葉自体を聞いたことがない子どもが 7 人。「飛行機で爆弾を落とした」「銃や刀で戦った」「ゲームと一緒に」など、人と人が戦ったということを知っているのが 8 人。現在、流行しているゲームから戦争は「戦い・けんか」という認識をしているようだった。「国同士の殺し合い」と答えたのが 11 人。この子どもたちからは「戦争はやってはいけない」「家族が死んで悲しいこと」というような発言が聞かれたことから、家庭での会話や、絵本からの知識があることがわかった。最後の詳しく知っていた子どもは、戦争は日本から仕掛けたことで、日本も悪いんだというような発言が聞かれた。

（2）ねらいについて

反戦平和教育といえば、高学年の社会科や修学旅行で扱うことが多いが、小学校低学年から反戦平和教育にとりくみ、戦争があるとつらい、悲しい、いやなことがあるということがわかり、学年が上がったときに、どうして戦争が起きるのだろうか、どんなことがあったのだろうかと発展できればいいと考えた。そのために、小学校 1 年生の興味関心を生かした反戦平和教育を実践して、平和な世界を望む心情を育みたい。

3 本時の指導（1／1）

（1）本時のねらい

戦時中の食生活を知ることによって、戦争は食べたいものが食べられない、悲しくてつらいということがわかる。

(4) ゲストティーチャー（語り部）



稲葉 修三郎さん

河津町で生まれ育ち、兵役も経験した稲葉修三郎さんをゲストティーチャー（語り部）としてお招きした。

稲葉さんは、大正15年生まれの94歳。20歳で工兵として豊橋に2ヶ月間出兵し、豊橋で終戦を迎えた。現在も、河津町のふるさと案内人として観光ガイドや、地元の人でも知らない歴史や豆知識を教えてくれる。

本時の授業でも、河津町の戦時中の生活や、空襲からの逃げ方、当時の食生活などを教えてくれた。子どもたちも、いつもとは違う雰囲気の中、当時と現在の生活の違いに興味があるようで稲葉さんの話を食い入るように聞いていた。現在の小学1年生には、まだ早いのではないか。子どもたちに稲葉さんの声が届くだろうかと心配していたが、小学1年生にもわかりやすくやさしく話をしてくれたので、子どもたちもきちんと耳を傾け、疑問に思ったことは質問するなど、とても意欲的であった。

(5) 当時の食事を体験



事前に稲葉さんから、戦時中にどんなものを食べていたのか教えていただき、子どもにも食べさせられるように用意していた。河津町でも、お米の量を増やすためにお粥が食べられており、サツマイモのツルのぬか漬けや、脱脂粉乳が飲まれていた。戦時中は配給量が決まっており、満足にものが食べられなかった。タンパク質が不足すると、カエルや蛇、イナゴ、イモムシを捕まえて食べていた。本時の授業では、「お粥」「サツマイモのツルのぬか漬け」「脱脂粉乳」を試食した。



授業者としては、「まずくて食べられない。」「戦争中はこんなものを食べていたのか。」と驚く子どもの姿を期待していたが、本時が3時間目ということもあり、お腹を空かせた子どもたちはもりもり食べていた。お粥は食べる機会は少ないが、白米ということで食べやすかったのかもしれない。本当はアワやヒエを食べさせたかったが、河津町は比較的白米を食べられていたそうなので、今回は白米を選んだ。サツマイモのツルのぬか漬けは、私自身、初めて食べたが美味しく感じた。地元の伊豆では今でもよく食べられているようで、もしかしたら知らないうちに食べたことがあったのかもしれない。子どもたちも、稲葉さんに皮のむきかたを教わりながら試食していた。このサツマイモのツルのぬか漬けは好評で、完食した子どもが多かった。なかには、美味しくて皮まで食べる子どもや、余っ

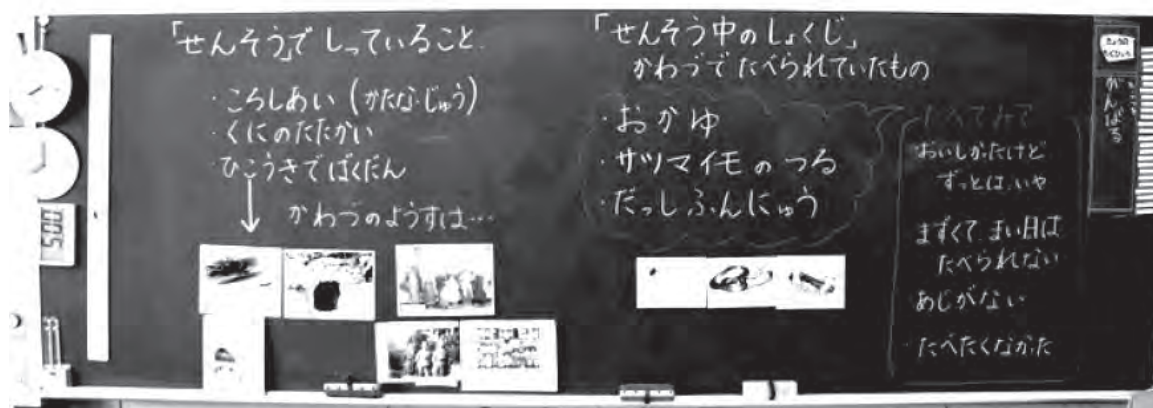
ているものをたくさんおかわりする子どももいた。しかし、やはり食べ慣れていない子どもは、なかなか口に入れることができずに食べるのを躊躇していた。

4 子どものふり返し

戦争を知らなかった子どものふり返しから、様々な意見が出された。

- ・あんなにまずいものを食べて生きていたんだ。
- ・これからは、ご飯はありがたいと思って食べます。
- ・意外に美味しかった。
- ・戦争は怖いから嫌だ。
- ・戦争は行きたくない。
- ・戦争はやったらだめ。
- ・稲葉さんは戦争に行っただけで辛かったと思います。
- ・稲葉さんが色々教えてくれて、戦争ってだめなんだとわかった。
- ・戦争は怖い、悲しい、嫌だ。でも、ご飯は美味しかった。
- ・稲葉さんが生きて帰ってこられてよかった。

稲葉さんとは事前に打ち合わせを行ったが、内容が1年生には刺激的ではないかと心配をしていた。しかし、授業をふり返ってみると稲葉さんの話を真剣に聞く子どもの姿や、戦争はやってはいけないことだと振り返りに書く子どもがたくさんいてくれたので、思い切って実践してよかったなと感じた。内容的には、住んでいる河津町の戦時中の様子や、当時の小学生の話が聞けたのがよかった。子どもたちも今の生活と比較できて聞きやすかったのだと感じる。授業後に「戦争って嫌だな、今が一番良いな」という子どもの発言を聞いて、平和を好む心情が芽生えたように感じた。やはり低学年からの平和教育の実践が大切である。



◇ 2年間の研究をふり返って

平和教育研究委員会として活動した2年間は、小学1年生の担任をしておりました。ここで平和教育を学んでいくにつれて、小学1年生から反戦平和教育を実践したいという気持ちになりました。兵役を経験されたゲストティーチャーをお招きして、戦争の話をしていただきましたが、私自身、知らないことが多くて勉強になることがたくさんありました。ゲストティーチャーがもたらす教育効果は大きいなと感じました。これからも、低学年からの反戦平和教育を実践して、平和な世界を望む子どもたちを育てていきたいと思います。



給食について考える ～ざんぱんはどこへ行く？～

SDGsの目標12のターゲット3に食料の廃棄や食品ロスを減らすことが挙げられています。飽食の現代だからこそ、子どもたちは、食料のありがたさに気付いていかなければならないと思います。

学校生活の中、2年生の子どもたちにとって、身近な食料と考えると給食が挙げられます。その給食は毎日、残飯が出てきています。そこで、残食があることは知っているが、残飯がどのように処理されているのかは知らない子どもたちが、残飯の行方を学習していくことで、食料に対しどのように向き合っていけばよいかを考えていくきっかけとしたいと思います。

◇ 授業の具体

学級活動学習指導案

指導者 馬場 誠也（富士市立鷹岡小学校）

1 題材名 「給食について考える」～ざんぱんはどこへ行く？～

2 題材目標

食べ物を大事にし、給食を作る方々や食料の生産等に関わる人々へ感謝する心をもつ。

【知識・技能】

給食は、給食を作る方々や生産者など、多くの人々の苦労や努力に支えられていることを理解し、食料を無駄にしない工夫や食事の仕方を覚える。

【思考力・判断力・表現力等】

自然の中で動植物と共存している自分について考え、給食について食品ロスの視点も含めて環境や資源について何ができるかを考えるようにする。

【学びに向かう力・人間性等】

食事のあいさつで、食に関しての感謝の気持ちを表現しようとする態度を養う。

3 本時の指導（2／2）

（1）本時のねらい

残飯の行方を自分たちで想像しながら考えていく中で、ゴミになっていき自然のためにならないのではと思っている子どもたちが、栄養士の話から、実際は肥料にリサイクルされていることを知り、無駄になっていないことを学習すると同時に、給食についての絵本の読み聞かせを通して、残飯はあってもいいのかを問い掛けながら、自分たちでできることは何かを考えて、改めて残飯を減らす必要性があることを認識するとともに、作り手の思いを知ることで給食に対する意識を高める。

(2) 指導過程

段 階	教員の働きかけと予想される子どもの活動	留意点
前 時	給食をどうしていきたいのか ①大事に食べたい。5人 ②残飯0にしたい。18人 ③命を無駄にしたくない。2人 ④大きく成長したい。5人 ⑤好き嫌いをなくしたい。5人 ⑥感謝の気持ちをもちたい。3人 今知りたいことは何？ ①残飯はどこへ行くの？ ②給食室の中は？ ③給食の歴史は？ 残飯とは何かな？ 食べられるものが、いろいろと混ぜられて食べられなくなるもの 残飯の行方を予想してみよう 予想 ゴミ捨て場－収集車－処理場－埋める 考え 燃やされた灰が役立つものにかわったらいいのに	給食に対して、子ども自身の考えや想いを整理する。 残飯がどのように扱われているかに関心がよせられよう声掛けを行う。
本 時	残飯行方を行方について栄養士さんにきこう。 バケツにためられる⇒樽にためられる⇒業者が取りに来て、肥料に加工する⇒野菜農家に届けられて肥料に使われる⇒育った野菜が再び、給食に使われる。 ・残飯はリサイクルされて、再び自分たちの給食となる 結論⇒残飯は役に立っている 栄養士さんの話を聞いてどう思った？ ・残飯が肥料になっているとは知らなかった。 ・それで育った野菜がまた、給食になるんだね。 ・残飯はゴミになっていないんだね。 ・役に立っているんだね。 絵本「給食番長」の読み聞かせを行う もう一度給食について考えてみよう ・残飯は役に立っているけど、やっぱりないほうがいいな。 ・作っている人のことを考えると、残さずに食べたい。 ・給食を大事にしていきたいな。 ・残飯をみんなでなくしていきたい。 給食室のみなさんに手紙を書こう ・残飯をなくしていきたいよ。 ・たくさんの給食を作ってくれてありがとう。 ・残飯はリサイクルされて、また給食になるんだね。 ・給食をたくさん食べて、大きくなっていくよ。 ・嫌いでもがんばって食べていくよ。	残飯の行方が実際にどうなっているのかを今までの学習を元にして、栄養教諭に質問してみる。 市の工夫で残飯が、無駄にならずにリサイクルされていることをおさえる。 給食に対して食べる側だけでなく作る側の思いに関心がよせられるように声掛けを行う。 【評価】 作り手の思いを知ること で、給食に対する意識を高める。 (ワークシート・手紙)

4 授業後の反省と評価

『給食をどうしたいのか』では、「給食を大事にしたい」「大きく成長するために残さず食べていきたい」という思いが強くあった。しかし、現状は好き嫌いや小食から残飯がない日がないことをわかっている。思いと行動が伴っていないことが現状である。

今知りたいことの中で、「残飯の行方」の関心が高かった。そこで、残飯の行方について予想してみると、ゴミになると考えていた。そしてゴミになるとどうなるかを追究していくと、残飯は焼却されて灰になり、それ以上のものにはならないから埋めていくと結論付けた。そして、灰は毒になるという思いの子どもたちと元は食べ物だから毒にならない子どもたちに分かれたが、結果として、埋めるので役に立っていないとの考えになった。そこから、残飯の灰が役立つものになると良いと考えた。

- ・残飯が灰になって埋めるのは良くないと思った。
- ・残飯が灰になって埋める場所が満タンになると世界が壊れるんだな。
- ・灰が雨と一緒に地下に行って飲み水になるのは嫌だな。
- ・世界の地面がバイキンだらけになってしまう。
- ・やっぱり残飯はないほうがいい。
- ・残飯は燃やさないと思う。
- ・埋めるということは本当にいいのかな？どこに行くのかな？
- ・役立つものによって変わってほしい。
- ・埋めてもなくならない。
- ・灰が役立つといいな。

残飯がゴミになると自然に影響していくのではないかと考えるきっかけとなった。また、残飯がゴミにならない工夫があるといいと考えるようになった。

このようなことを感じ取り、残飯に対して考えを少し深くできた子どもたちは、実際の残飯の行方について栄養教諭から話を聞いた。実際の残飯は、業者によって肥料に加工されて、農家のもとに行き野菜を育てることに使われて、また給食の材料となったおり、食品ロスにはなっていない。このことを栄養教諭から教わった子どもたちは、驚くとともに役立つものによって変わることには納得していた。

栄養士の話聞いて	
残飯は役に立っている	23人
作ってくれる人のことを考える	2人
残飯があると給食の人が悲しむ	1人
残飯を減らす	1人
残飯はリサイクルされて戻ってくる	5人

それでも、残飯は少なくしていきたいという思いがある。そこで、絵本「給食番長」の読み聞かせを行った。「給食番長」は、給食の作り手の思いについて考えさせられる内容となっており、子どもたちもその思いを強く感じたようであった。右記のような内容の手紙であった。特に「残飯をなくしたい」「感謝の気持ちをもつ」の2点を強く感じたようである。作り手の「食べて大きく成長してほしい」という思いを感じ取ることができた子どもたちは、食に携わる人々に対して感謝の気持ちをもつきっかけをつかむことができたと感じた。そして、残飯をなくしていくことが自分たちにできる行動だと考えたことと思われる。

給食室への手紙		
嫌いでも頑張って食べる	8人	28%
好きになりたい	2人	7%
残飯をなくしたい	18人	62%
残飯が肥料になることが分かった	9人	31%
作ってくれた人のことを考えたい	5人	17%
たくさん食べて大きく成長する	5人	17%
ありがたい感謝の気持ちをもつ	20人	69%
残飯は役に立っている	4人	14%

さて、飽食の現代だからこそ食に対して感謝の気持ちをもち、また食事を大切にしていかなければならない。だからこそ、給食の存在について考えていく必要があると考える。給食は「成長期にある児童生徒の心身の健全な発達に資するものである」と定められている。今回の授業を通して、子どもたちは、「残飯が無駄にならない工夫があること」「作り手の思いを感じたこと」の2つを学び、給食を大切にしていこうとする姿勢が育ったことだろう。これからもその姿勢を忘れずに給食を大切にしていこうとすることで、普段の自分たちの食に対する意識を高め、食品ロスが多い現状に関心を寄せられるようにしていきたい。

5 資料



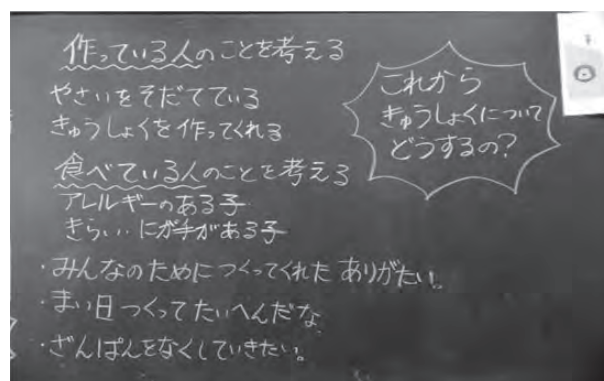
絵本「給食番長」（作／絵：よしながこうたく 出版社：好学社）

番長と呼ばれている子どもが、クラスみんなを先導して、嫌いなものはすべて残してしまい、それを見た給食のおばさんたちが家出をしてしまう。給食を作る人たちがいなくなって、困った番長たちは…。

みんながおいしく給食を食べられるのはおばさんたちのおかげ、そんな作り手の思いを大切にしなければならぬことを思い起こさせてくれる作品。



授業風景



◇ 2年間の研究をふり返って

平和で持続可能な社会を目指すことについて、子どもたちは何を学習していかなければならないのかを改めて考えることができました。これからは、子どもたち自身が、SDGsを頭に置きながら持続可能な社会を意識して生活を送っていけることが、何より大切であると感じました。特にSDGsについては、まだまだ認知が低く、未来へ向かって成長していく子どもたちのために、学校や社会全体で意識を高めていくことが必要だと思います。教職員が今ある世界規模の課題に目を向けて、授業等を通して必要と思われることを伝えていかなければいけないと感じた2年間でした。



日本と世界のよりよい水環境を考えることを 通して平和構築力の基礎を養う ～いつまでも大切にしよう 75 億人の命の水～

地球上に暮らす、すべての人にとって必要不可欠な「水」。現在、日本では、様々な人々の努力によって概ね良好な水環境が保たれています。しかし、世界に関心を寄せてみると、安心・安全とは言い難い水を利用せざるを得なかったり、そもそも十分な水量を確保できなかったりという厳しい現実を知ることになります。従来の社会科学習に、SDGs（Sustainable Development Goals「持続可能な開発目標」）の視点を加え、安全な水の確保という世界共通の課題の解決方法を考えることを通して、「他者に共感する」や「いろいろな立場からものごとを考える」、「長期的な展望をもつ」といった平和構築力の基礎を養っていきたいと考えました。

◇ 授業の具体

社会科学習指導案

指導者 寺島健太郎（島田市立島田第二小学校）

1 単元名 いつまでも大切にしよう 75 億人の命の水

（教科書：3・4 年下『水はどこから』p.60～73）

（SDGs 目標 6「すべての人々の水と衛生のアクセスと持続可能な管理を確保する」を視点に加えて）

2 単元について

（1）単元目標

- ・暮らしに必要な水を確保するために、水道事業が計画的に行われ、使った水は適切に処理されている。ごみの処理と同様に、様々な人々の努力によって自分たちの健康で快適な生活が成り立っていることを理解している。
- ・水は無限の資源ではなく、限られた水を繰り返し各所で利用している。今後も良好な水環境を保つためには、地球規模で考え、皆で保全していくことが不可欠である。これを一例として、世の中をよりよくしていくために自分なりにできることを考えたり、周囲へ伝えたりして、それらに進んでとりくもうとする態度を身に付ける。

（2）児童について

本学級には、様々なことに興味・関心を示し、知的好奇心が旺盛な子どもが多い。教員の投げかけに敏感に反応し、未知の学習活動に対しても臆せずとりくもうとする。また、皆で授業を作る・すすめるためには、その内容が不完全であっても、一人一人が声を出すことが大切であることも知っている。特に社会科の場合、「証拠（＝根拠）がある意見」には、人をより納得させる力があることも経験を通してわかっている。これらに加えて、本単元では、「単に意見を出す」ことから脱し、他の強い意見に流されずに「自分の思いを主張する」ことへとステップアップを図っていきたい。

3 単元について

(1) 本単元の価値

毎日、私たちが何気なく使っている「水」。我が国では、「水と安全は無料」という感覚があった。子どもたちにとっても、水は空気と同じように「あって当たり前」のものであり、それがもし無くなったらと想像することすらない。しかし、無限に思える水は、その実、世界中を循環し、繰り返し人間生活に利用される有限の資源である。また、日本において、いつでも簡単に安全な水を手に入れられるという現状は、「ごみの処理」と同様に、「どこかで、誰かが」行っている日々の努力と工夫によって成り立っているのである。

前単元「健康な暮らしとまちづくり」の「ごみはどこへ」の学習では、ごみの減量のために尽力する人々について調べたり、今後予想される課題について考えたりすることを通して、「一人一人の力は小さいけれど、今より社会をよくしていくためには皆で気を付けて行動を続けていく」必要性に気付くことができた。「ごみ」や「水」は誰にとっても関わりの深い事象であり、共通の課題が存在するため、主体的に考え、自ら行動する大切さを学習するのに適した材と考える。

以上のことから、水についての学習においても、まずは現在の良好な水環境について知り、将来的な課題についても理解を深めることで、「どこかで」「だれかが」という見方に「いつもの生活で」「自分も」という考え方を取り入れようとする態度や自覚を養いたい。

(2) SDGs(Sustainable Development Goals)「持続可能な開発目標」を視点に入れる価値

「水を流しっぱなしにするともったいない」「川や海を汚してはだめ」。本単元の学習以前にも、子どもたちは生活経験としてこのような言葉を耳にしてきている。現実の自分の行動とは無関係に、「水を大切に」ということを観念的に捉えている。しかし、なぜそれらが重要なのか、切実感をもって考えることができているかといえは難しい。教科書の内容で日本における水環境（水は、どこから来てどこへ行くのか）を一通り学習したとしても、この切実感という点においては不十分であると考えられる。なぜなら、日本における水道事情や下水処理は概ね良好な状態が続いているためである。子どもたちが課題や疑問を感じる場面は少ないことが予想される。



しかし、視野を世界に広げてみると、干ばつや海面上昇、健康を害する水の日常的な摂取や不衛生な廃水汚染、さらには水源を奪い合う「水戦争」といえる状況まで、その未来像は決して明るいものではない。SDGsは、国連加盟国のすべての国民がアクティブメンバーとなる、「世界の未来を変える持続可能な開発目標」である。その具体的な内容（2030年までに達成をめざす17のゴール）の1つにある「No. 6 安全な水とトイレを世界中に」という視点を本単元に加え、「水はどこから来てどこへ行くのか」だけでなく「汚れた水がそのまま川や海に流されたら」「地球の未来はどのようなになっていくのか」といった思考につなげたい。地球上に存在する水のうち、人間が利用することができるものはごくわずかであり、循環を続けながら繰り返し利用されていることを知ることを通して、他地域で問題となっている事実は、日本に住む自分たちとも決して無関係ではないことを考えたい。そして、地球規模で問題を捉え、将来も良好な状況が続くよう自分の目の届く範囲でできることを考え、実践していこうとする意識を高めていきたい。

第一回 ①②

第二回 ③④⑤⑥

第三回 ⑦⑧⑨⑩

（つかむ・押さえる）
うわーくさい！ 何か浮いてるよ！

◇ 廃水調べをしよう。①

生活の中で流している水にはどんなものがあるだろう。

（学校）・手洗いの水 ・うがいの水 ・歯磨きの水…

（家では）・お風呂の水 ・洗い物、料理中…

わたしたちが使う水はどこから来て、どこへ行くのだろう

トイレの水はどうなるの？

水ってなくならないのかな？

◇ 地球上の水はなくならないのだろうか。②

・地球の水は限られている。人間が使える水はほんのわずか。

・少ない水が循環して何度も使われている。

・体に良くない水を飲んでいる人たちも大勢いる。

私たちの使う水はどこからくるのだろう。

水を使うのが大変な国もたくさんあるんだな。

日本の水は大丈夫なの？

◇ 浄水場について調べよう。③④

川の水が飲めるようになるのには、どんなひみつがあるのだろう。

・川から、浄水場までの水の通道

・浄水場から、家や学校までの水の通道

・浄水場の施設の様子

使い終わった水はまた川に戻るのかな。

浄水場のおかげで安心・安全な水を使うことができるんだな。すごい！

◇ 使った後の水はどこへ行くのだろう。⑤⑥

・どの家でも下水道を使えるわけではない。

・風呂、台所の水はそのまま流されている場合もある。

・油やごみを下水に流すと大変なことになる。

・処理された水が再利用される場合もある。

もしどんどん水が汚れていったら、どうなってしまうんだろう。

何でも流してしまうと川や海が汚れてしまうんだね。

◇ 今、世界ではどんなことが起きているのだろう。⑦

・多過ぎる水（海面上昇、洪水）、少な過ぎる水（干ばつ）

・必要な所に水が行き渡らない場合も多い。

・陸続きの国では水争いも…

・油やごみ、薬品等が遠くの海や国を汚している。

75億人の「命の水」を守るためには、どうしたらいいのだろう。

このままでは大変なことになってしまうかも。

みんなで気を付けて何とかできないかなあ。

◇ 水源を守る取組や、ダム・森林の役割について調べよう。⑧

・仕事としてだけでなくボランティアの人たちも関わっている。

・ダムも森も、水の量をちょうどよく調節するために必要。

自分たちが気を付けることができることは何だろう。

◇ 命の水を守るためのアピール文を完成させよう。⑨⑩【本時】

・学習したことを入れてまとめよう。

・みんなで何とかしようという思いを伝えるには…

・1人1人ができることをやるのが大切。

「命の水」をいつまでも大切にしていきたいな。

水はどこから来てどこへ行くのか

これから自分たちはどうしていくべきか

アピール文を完成させよう！

一人一人のもつ力は小さいが、皆の力を合わせて社会をよりよく変えることができる。
そして自分も、社会をよりよく変えていける力をもった大切な一人である。

4 本時の指導

(1) 本時の目標

良好な水環境を今後も守るために、これまで学習してきた内容から友だちや家族に伝えたいことを選択・判断し、「1文アピール」としてまとめることができる。【思考力・判断力・表現力等】

(2) 本時の展開 (10 / 10 時)

時	学習活動○ 予想される児童の表れ・ ふり返し◎	継	手立て・ 支援◇ 評価【】
5	○学習問題を確認しよう。 地球上のだれもがこれからも安全な水を使うことができるように、学習した事実を入れて、「1文アピール」を完成させよう。	全	・既習事項をまとめたり、アピール文を作成したりするためのキーワードを確認しておく。 ex. 下水処理、節水、日本、外国、地球全体、環境、未来の世の中、だれもが安全な水を使えるように 等
20	○みんなに水を大切にしてもらうために、どんな事実を伝えたらいいかな。これまでに学習したことをまとめよう。【要素A】 事実【地球上の水の量】 ・世界中にある水の量は限られている。 ・そのうち、人間が利用することができる水は、ほんのわずかである。 ・地球全体で見ると、同じ水を何度も繰り返し使っている。 事実【日本の上水道】 ・日本にはすばらしい水道があり、いつでも安心、安全な水が使える。 ・「緑のダム」と呼ばれる森を守るために努力されている。 事実【世界の水環境】 ・外国では安全でない水を利用している人たちも大勢いる。 ・世界の人口は増え続けている。 ・水が多すぎたり足りなかったりする地域がある。 事実【日本の下水処理】 ・日本では、使い終わった水は川や海を汚さないよう処理されている。 ・処理された水は、場所によって再利用されている場合もある。 ・ごみや油が下水に流されてしまうのは大きな問題になる。	個・グ↓全	・確認していく「事実」は、アピール文を考えるための「視点」であり「要素」である。これらの要素がアピール文作成の根拠となる。 ◇内容が多岐に渡るため、「日本での場合」と「外国での場合」の2つに大別してまとめるようにさせる。 ◇まとめや説明に苦手意識をもっている子どもには、どんなことを話そうとしているのか教師が尋ねたり、自分のノートや教室掲示の内容を参考に、既習事項を具体的にふり返ったりして考えるようにさせる。 ◇要素Aと要素Bに分けて、2段階で考えることにより、論理的なアピール文を考えることができるようにさせる。
5	○これから地球のみんなが気を付けていくべきことは何だろう。【要素B】 ・自分の国のことだけを考えないで節水に努力する。 ・下水にごみや油を流して川や海を汚さないように。	全	これまで学習してきたことを確認し、皆にわかってもらいたいことは何かを考え表現することができたか。【思考力・判断力・表現力等】(活動の様子)
10	○「1文アピール」を完成させよう。【要素A+B】 世界中で人が使える水はかぎられていて、日本では安全な水が手に入るけど、外国では安全でない水を使わないといけない人たちもたくさんいて、かんきょうがよごされている場合もあるから、これからの世の中で安全な水をだれもが使えるようにするために、自分の国のことだけを考えないで、節水したり水をよごさないように一人一人が考え気を付けていこう！	個	・文章のつながり上、どうしても「1文」にできない場合は、その場で出された言葉を並べてまとめることを許容する。 これまで学習してきた内容を根拠として、皆が気を付けるべきことをアピール文として表現することができたか。【思考力・判断力・表現力等】(活動の様子)
5	◎ふり返しをしよう。 ・勉強したことを入れて、いいアピール文ができた。 ・これからみんなで気を付けていけるといいな。		

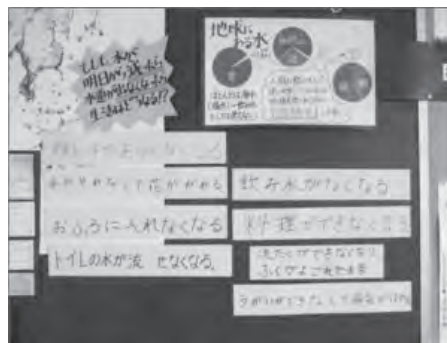
5 授業後の反省と評価



単元の導入として、生活班での廃水調べを行った。手洗いの水やうがいの水、歯磨きの水、そして給食の食器を洗った洗剤を含んだ水……それぞれを少しずつ、周りを黒色の画用紙で覆ったペットボトルに貯めていった。普段使っている水はすぐに流れて見えなくなってしまうため、材を「見える化」して問題意識をもたせることをねらった。翌日、周りの黒画用紙をはがす。貯めた水は白くにごっていて、泡が立ち、強烈な臭気が立った。「めっちゃうちゃくさくて鼻が曲がりそうになった。」「こんなのを

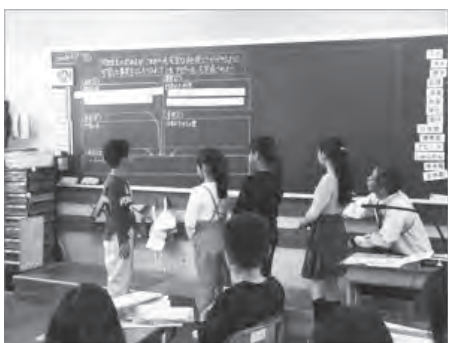
毎日流しているのかと思った。」授業後の感想からその驚きが伝わってきた。

次に、「地球上にある水の量は限られている」「その水は形を変えながら世界中で循環し、何度も使われている」ことを知った子どもたちは、「こんなに何度も使われている水はどんどん汚れていかないのか？」という思いから「私たちが使う日本の水は大丈夫なの？」という疑問をもつ。そこで、浄水場や下水処理施設の見学も併せて日本の上水道と下水道について調べていった。現在の日本については「こんな汚い水を処理している所があって、再利用までしてすごいと思った。」という思いをもつ一方で、生活環境が変わり今後も皆の水の使用について注意が必要であることを知り、「もし、どんどん水が汚れていったらどうなるのだろう」という疑問は残る



ことになった。

第3次として、世界では、汚れた水を主原因とする下痢で命を落とす乳幼児は、年間30万人（毎日800人）以上であることを知る。これ以外にも、多すぎる、少なすぎる水、きれいな水、汚染された水、異常気象や「水」戦争…世界には様々な水環境があること、汚染された水は、やがて遠い国で暮らす人々の生活や命を脅かす場合があることについて画像や動画を通して学んだ。



本時は、単元の終末段階にあたり、これまで学習してきた事実を根拠として「地球上の誰もがこれからも安全な水を使うことができるように、『1文アピール』を完成させる」ことを目標に全体場で交流した。「1文アピール」は、その名の通りさまざまな情報を1文にまとめるため、どの内容を盛り込むかを取捨選択し、意味が通る内容にするために順序にも配慮する必要がある。これは、前単元においても次のように学習内容をまとめる際に用いた手法である。

【「ごみはどこへ」1文まとめ】

島田市は、市内のどの家のごみも全部集めることができるようにごみ収集場所をあちこちに作り、曜日を決めて集め、高い燃料を使って1800度の^{ようゆうろ}溶融炉を持つ「田代環境プラザ」で処理しているが、CO2はどんどん出るし、最後に残ったスラグとメタルは最終処分場に埋め立てられるため、ただ「リサイクルをすればいい」と考えないで、子どもも入れた一人一人が少しでもごみを出さないように気を付けていくことが大切。

子どもたちはアピール文に入りたい事実をふり返り、それらを順序に気を付けてつないでいった。そして、最終的に次のような「アピール文」を作成することができた。

日本にはすばらしい上水道があり、主に塩素消毒、沈でん、ろ下という 3 つの方法で水をきれいにし
ていて、下水もしっかりしょ理されているが、地球上で人間が利用しやすい水はかぎられていて、何度
もじゅんかんしていて、くり返し使われているし、外国では不衛生な水を飲んだり、薬やごみなどが流
れている所もあるから、一人一人が少しでも水をむだにしないように、節水したり、油やごみを流した
りしないようにして、気を付けていこう！

水についての調べた知識・理解とともに、「世の中は一人一人の力でよりよく変えていくことができる」「そして、自分もその一人である」という意識もまた、子どもたちの中に根付いていくことを願う。

6 資料

(1) 参考資料

- ・日能研教務部「SDGs 2030 年までのゴール」神奈川：日能研,2017
- ・日能研教務部「環境を考えるお話 BOOK ② 水から始まるお話」神奈川：日能研,2013

(2) 切実感をもたせ、より主体的に課題にとりくむための教材資料の工夫

①視覚と感情に訴えかける画像資料（抜粋）



②具体的数値を確認し、現状や問題を正確に捉える。

ex. 地球上の水の 97.5%は海水、残り 2.5%の淡水のうち 70%が氷や氷河である。

人間が最も利用しやすい河川水は地球全体の 100 万分の 1 しかない。

水道の水がそのまま飲める国は世界の中で 15 ヶ国ほど……。

◇ 3 年間の研究をふり返って

今回の実践では、平和と共生のため、「平和的に解決する力を付けるための 6 つの柱」のうち、「環境の保護」「国際理解」「生命の尊重」を特に重点的に扱った。これらはすべて「ものごとを多面的に捉え、平和的に解決する力」の育成のため欠かせない要素である。3 年間の研究期間において、学年も教科もまちまちな実践にとりくんだ。そして他の研究員からも多くの実践紹介や示唆をいただくことができた。「平和教育の種」は、学校教育や子どもたちの生活の中に多々転がっている。どの国の児童生徒にもこのような能力と意識が必要であると改めて思いを強くすることができた。

ありがとうございました。



フードロスを考えよう

本研究委員会の中で共同研究者から貧困や飢餓、子ども労働、人権や教育に関する世界に広がる課題と SDGs「持続可能な開発目標」とを関連付けた話を聞き、特に飢餓が印象に残りました。

日頃、給食の時間を何気なく過ごしている子どもの様子を見ていて、世界の食料事情を教えることを通して、給食のありがたさを理解させるとともに、フードロスを減らす工夫や実践意欲と態度を育てたいと考えました。

◇ 授業の具体

第 5 学年 1 組 学級活動学習指導案

指導者 池谷 崇仁（浜松市立都田南小学校）

1 題材名 フードロスを考えよう ～給食の時間をふり返り SDGs を考えよう～

2 題材設定の理由

本学級の子どもたちが給食を食べている様子から、毎日同じように一食分の給食が目の前にあることが当たり前になっていると感じた。また、苦手な食品があれば減らしたり残したりすることが平気で、時間内に完食しようとする意識が低いようにも感じた。さらに、食品を処分することに対する罪悪感やもったいないと思う気持ちが薄いと感じた。したがって、普段の食事についてふり返らせるとともに、フードロスを減らす工夫や努力について考えさせ、実践意欲と態度を育てたいと考えた。

本校には、外国にルーツをもつ子どもが 6 人いて、本学級にも 2 人在籍している。2 人とも自ら積極的に友だちとの関わりをもとうとする子どもで、周りの子どもも何の偏見ももたずに関わっている。市内 90 校余りの小学校の内、外国にルーツのある子どもが在籍している約 30 校に調査したところ【資料 1】のとおり世界 31 か国におよぶことがわかった。人数もたいへん多い。5 年後、本学級の子どもたちが義務教育を修了し、

【資料 1】市内の外国にルーツをもつ児童の国名 (50 音順)

欧州	アジア	北中米
イギリス	インド	アメリカ
イタリア	インドネシア	カナダ
ウズベキスタン	韓国	南米
ドイツ	タイ	アルゼンチン
パキスタン	中国	チリ
フランス	ネパール	パラグアイ
ベルギー	バングラデシュ	ブラジル
ポーランド	フィリピン	ペルー
ルーマニア	ベトナム	ボリビア
ロシア	マレーシア	
アフリカ	オセアニア	
ナイジェリア	オーストラリア	
	ニュージーランド	

高校生や社会人となって市内外の各地に出るときには、世界各国にルーツをもつ人との関わりが多くなることが予想される。また、入管法の改正によって関わる機会の割合はさらに増加することが予測される。これらのことから本学級の子どもたちには世界の国々や人々、文化に興味や関心をもたせたいと考えた。

国際連合が掲げる国際社会の共通目標『SDGs（持続可能な開発目標）2030年までのゴール』の存在を知らせたい。2030年は子どもたちにとって人生の節目となることも意識させたい。17の目標の中でも「目標2 飢餓をゼロに」を中心に引き上げ、諸外国の食料事情に興味や関心をもたせたい。そして、食料で困る人々が世界各地にいて、地球全体の課題であることを理解させたい。

3 活動計画

時	活動内容
第1時	給食の食材の多くが市内で生産されていることを栄養教諭から教えてもらい、食材に恵まれている地域であることに気付く。
第2時	世界の食料事情を知り、自分たちの食習慣を見直し、改善点を見出す。そして「給食残食ゼロプロジェクト」を立ち上げ実行する。
第3時	貧困や飢餓で苦しむ人々のためにとりくみについて調べ、協力できるとりくみや新たなとりくみについて考える。

4 指導の実際

(1) 第1時

給食食材の多くが市内で生産されており、地産地消をすすめていることを中心にした授業を栄養教諭がT1となって行った。本市が食材に恵まれている理由について、地形や気候が良く、流通面でも大変恵まれていることに触れた食指導をした。さらに、その日の給食献立に関する話も栄養教諭からしてもらい、地産地消のよさを感じさせることができた。

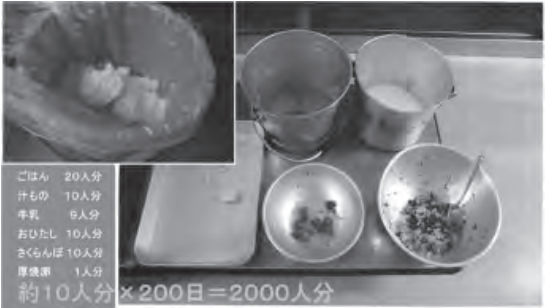
(2) 第2時

① 本時の目標

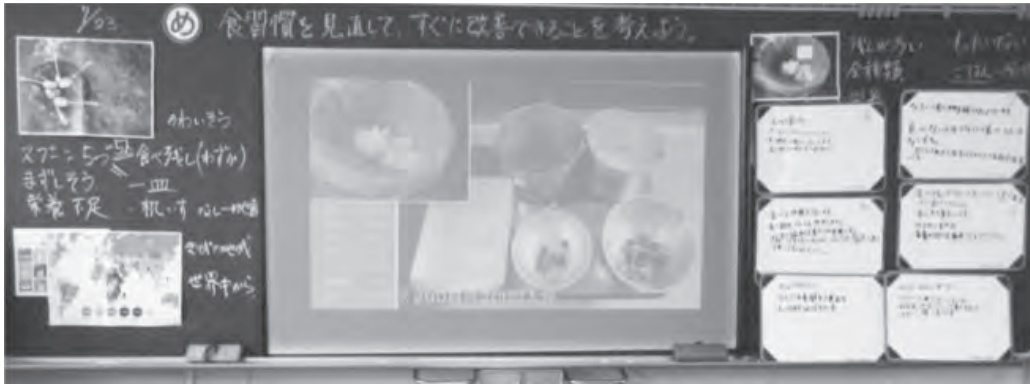
食料で困る人々の実態やSDGsに関わるとりくみについて考える活動を通して、望ましい食習慣の形成を図る。

② 指導過程

学習活動 ・ 予想される子どもの表れ	・ 指導上の留意点や支援 ○主体的にとりくむための手だて
1 世界の食料事情に関心をもつ。 ○写真をみて、わかることや気づいたことを書き出そう。 ・ 日本ではなく外国。 ・ 5人で一皿。 ・ 食料が少ない。 ・ 日本は豊か。	・ 飢餓地域の写真を見せてわかることを書き出し、発表させる。 
2 世界の食料事情を知り、自分の食習慣を振り返る。 ○映像を見て世界の現状を知ろう。 ・ SDGsが、すでに始まっている。 ・ 自分の食習慣は、申し訳ない。	・ NHK for school「世界の終わりがやってくる!？」scene 2・3を見せ、深刻な状況とSDGsの存在を理解させる。 

学習活動 ・ 予想される子どもの表れ	・ 指導上の留意点や支援 ○主体的にとりくむための手だて
○ハンガーマップからわかることや気づいたことを書きだそう。 ・ 近くにも飢餓に苦しむ国がある。 ・ アフリカに多い感じがする。 ○市内の外国に関わりのある児童の国を知ろう。 ・ こんなに多いとは知らなかった。 ・ さっきハンガーマップでも出た。 3 本時の題材を確認する。 食習慣を見直して、すぐに改善できることを考えよう。 4 食習慣を見直し、改善策を考える。 ○写真を見てわかることや気づいたことを書き出そう。 ・ もったいない。 ・ 努力が必要。 ・ 好き嫌いはだめ。 ・ みんなで協力。 ○給食の時間に関わることですぐにできそうなことを考えよう。 ・ 残さない。 ・ 欲張っておかわりしない。 ・ 配膳を早め食べる時間を確保する。  5 本時の学習を振り返る。 ○この授業で考えたことやこれからとりくんでいこうと思うことを書こう。 ・ 食料についてよく考えたことはなかったが、今後、食事の時にはいつもありがたさを噛みしめて食べたい。 ・ 配膳中から、やるべきことを素早くやるようにしたい。	 ・ 国連のデータは、国内の平均で色分けされており、都市別にみれば飢餓に値しない部分があることを、中国を例に説明する。 ・ 飢餓が世界中に広がっていることや、スポーツ等を通して知っている国でも飢餓が問題に挙げられていることに気付かせる。さらに、国旗シールを貼ったものを提示して、外国にルーツをもつ児童の国と飢餓で苦しむ国の関連を読み取らせ、身近な問題であることを感じさせる。 ・ ペアで給食の残飯写真を見てわかることをできるだけ多く書き出させる。最後に給食関連ですぐに改善できそうなことを考える。 ○給食の時間に絞って考えさせ、実践意欲を持たせる。 ○グループで出た意見をホワイトボードに書き、全体発表で使用する。 これまでの食習慣を振り返り積極的に話合いに参加したりとりくみを考えたりすることができた。(発言、ワークシート) ・ 次時は、学級としてとりくんでいくことについて話し合うことを伝える。

【資料2】第2時の板書

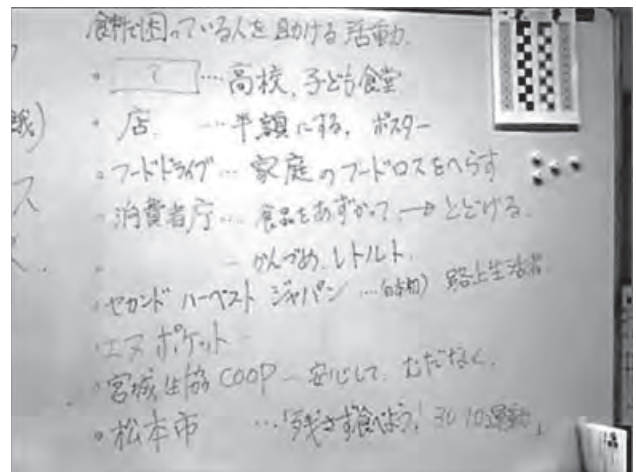


(3) 第3時

身近な県内や日本人のとりくみとして、特別の教科道徳で既習の「ボタンに日本の農業を」の西岡氏の功績やNPO法人「フードバンクふじのくに」の活動内容を紹介して、探究意欲をもたせた。インターネットを活用に不慣れな子どもが多いため、検索時のキーワードをいくつか挙げさせてから調べ学習をさせた。

【資料3】第3時の板書の一部

子どもらは予想以上に多くのフードロス削減の活動を見つけた。中には、身近なスーパーマーケットのとりくみもあり、意外と身近なところでの工夫や気付かぬうちにフードロス対策に関わっていることに驚かされる子どももいた。



4 授業後の反省と評価

(1) 提示資料について

①画像

- ・一皿にスプーン5本の写真は、子どもたちにとってインパクトがあり、世界の食料事情を知らせることができた。また、写真の中のスプーンと皿の比や品数、残食量、地面に皿が置かれている状況など、子どもによって様々な観点からの発言があり、多角的な学びにつながったと思う。
- ・本校の給食残飯写真は、学習の動機付けになり、子どもたちの実践意欲がより一層高まったように感じた。また、残食が何人分に当たるかを示したことにより、子どもたちも身近な実態が具体的に把握でき、残食の多さに驚いたり、飢餓の人々を思いながら考えたりすることができた。
- ・ハンガーマップ上に外国にルーツをもつ子どもの国旗を貼った画像からは、10年後(2030年)の自分を想像して全世界の様々な国の人々と関わりについて考えさせることができた。

②映像

- ・NHK for schoolの子ども向けに制作された動画は、大変使い易く、子どもが理解しやすい内容になっていると改めて感じた。今回のように必要なシーンだけを選抜して見せることによって、子どもは集中を維持でき、またねらいに沿った授業を展開することがわかった。

(2) 子どものあらわれについて

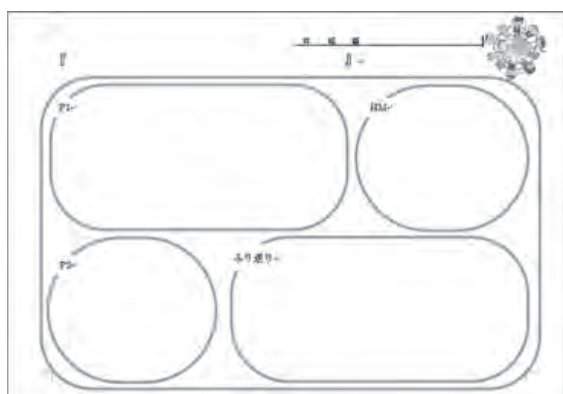
①グループ活動から

- ・話し合いのテーマを「給食の時間」に絞ったことで、積極的に考え意見を出す子どもが多く、翌日からの実践にすぐに生かした。しかし、話し合いの時間が短かったことや全体交流の方法は、反省すべき点である。交流方法を工夫することで、学級全体の共通理解がすすみ、深い学びにつながると感じた。

② ふり返りから

- ・給食の残飯データを自分事として捉えた子どもが多く、個人的な短期目標を立てることができていた。また、飢餓に苦しむ人々のことを考え、食べ物を大切にしようとする思いをもった子どももいて、食事関連の意識改革につながったと思う。
- ・数人の子どもは、世界の貧困や飢餓に視点を広げたり自分の将来目標を掲げたりすることができた。特別の教科道徳で既習の「ブータンに日本の農業を（西岡京治氏）」「2億人を救った科学者（大村智氏）」と関連付けて2人の偉業を再度紹介し、将来目標の実現へ後押しをしていきたい。
- ・資料を世界ー市内ー本校の順で提示したことで、子どもにとって徐々に身近なことになり、思考の流れに合っていたように思う。世界の現状を認識するためにも子どもの視点を世界に広げるためにも、子どもの発達段階に合った今回の資料提示は有効であったと思う。

【資料4】第2時のワークシート（ランチプレート型）と子どもたちのふり返り



ふり返り これから学校の給食や家で食べる給食を食べるときにごはんを食べたくても食べられない人がいるということを考えて食べ残しがでないように大切に食べようと思う。

ふり返り わたしは、残すことがたまにあるのでこれからは今日考えたことを生かして、残さないように、自分で努力しようと思います。来年には、残すことがないようにしたいと思います。

ふり返り 世界にはあまり食べれていない人がたくさんいることを知ったので、これからきらいなものもかんぱん食べて、残さないようにしようと思いました。

ふり返り 食べたくても食べられない人がいるから自分たちは食べられるだけ良いものを好ききらいをしないで、残すものを減らしたい。

ふり返り 食料不足の人々や、周りに住んでいるのに、ぼくたちの学校ではごはんなしで暮らしているのだから、これからは残さないようにしたい。

ふり返り 中央アフリカ共和国では、たくさんの食料で苦しんでいる人がいて、南アフリカ共和国では、井戸水が出なくて水を飲んで苦しんでいるので、大人になったら、そういう人を救う活動をしたいです。

ふり返り・あまりごはんが食べられない人が予想よりも多くてそんなことをしている人を救いたいと思いました。・ごはんをふつうに食べられている人が食べ残しをしている人が多いため、そういう人をうながさないで。

5 参考資料

- ・書 籍 「国連 世界の未来を変えるための17の目標 SDGs」
認定NPO法人 フードバンクふじのくに活動報告書
小学道徳教科書「はばたこう明日へ」（教育出版）
- ・児童書 「持続可能な地球のために 安心してくらしたい貧困・飢餓」
「持続可能な地球のために 学校にいきたい教育」
- ・画 像 食後の皿写真、インターネット「飢餓画像」で検索
国連ホームページから、ハンガーマップとSDGs 17の目標一覧
- ・動 画 NHK for school「世界の終わりがやってくる!？」

◇ 2年間の研究をふり返って

2018年度は、人間関係の構築や平和的な解決方法について考えさせる授業実践にとりくんだ。事前に教材や題材の扱い方について検討を重ね、いくつかの工夫を織り交ぜて授業を行った。子どもが考える平和的な解決方法は、日常の経験や体験が関係しており、多岐にわたる考えがあることに気付かされた。

2019年度は、SDGsを含んだ授業実践にとりくんだ。17の持続可能な開発目標を達成するためには、学校教育を含めた社会全体でとりくむ必要があることがわかるとともに、自分自身の視野も広げることが大切だと感じた。





未来がよりよくあるために

「国際連帯」＝外国籍児童・生徒との共存だけではなく、地球的問題群（地球が直面する問題）を越境的に解決することという捉えであり、まさに、この地球的問題群が紛争や対立の温床となっているのです。一国だけでは解決できないこの問題を、みな「地球市民」という意識をもって全世界で協力してとりくんでいく必要があります。地球的問題群の解決が平和な世界の構築につながるのです。

共同研究者のこの言葉を受け、SDGs の実践を行いたいと思いました。

◇ 授業の具体

国語科学習指導案

指導者 西井 知美（静岡市立清水小河内小学校）

1 単元名 未来がよりよくあるために（教材名「平和のとりでを築く」）

2 （１）単元目標

- ・「未来がよりよくあるために」どのようなことをすればいいのか、友だちの意見を聞いて考え、自分の考えを書こうとする。（学びに向かう力・人間性等）
- ・集めた情報を整理し、計画的に話し合い、自分の考えを広げたり深めたりすることができる。（思考力・判断力・表現力等）
- ・自分の考えが説得力をもつように構成を工夫したり、注釈や引用を用いたりして意見文を書くことができる。（言語についての知識・技能）

（２）単元構想

段階	時	教員の働きかけと予想される子どもの活動	留意点
つかむ 追究する	1	SDGs（持続可能な開発目標）の 17 の視点を知り、単元の見通しをもつ。 SDGs って何だろう？	・ SDGs に興味をもてるように、身近な事例を挙げる。
	2	静岡平和資料センターとの連携を図り、語り部から静岡空襲などの話を聞くことを通して、静岡にも戦争の被害があったことを知る。 静岡や清水にも空襲はあったのかな？	・ 戦争の被害について他人事ではなく、自分事として捉えられるようにする。
	3	『16 平和と公正をすべての人に』の視点に着目しながら資料「平和のとりでを築く」を読み、過去について知る。 筆者が一番伝えたいことは何だろう？	・ 前年度の夏休みの宿題として日記に書いた「平和祈念式典」のこととも関連付けて考えられるようにする。

つなげる	4	SDGs の 17 の視点から過去や現在の様子や問題について調べる。 今、世界にはどんな問題があるのだろうか？	• 16 だけでなく様々な視点から捉えられるようにする。
	5	調べたことを基にこれからどんな未来にしたいのか書き出し、その中から最も大切にしたいことを考えて、テーマを 1 つに絞る。 自分が思い描く「よりよい未来」にするために一番先に解決すべきことは何だろう？	• 身近なところだけでなく、地球規模で考える。 • 「地球市民」という言葉について考える時間をもつ。
	6 7	テーマについて本やインターネット、インタビュー等で調べ、自分の考えに説得力をもたせる。 何が原因で、どうしたらいいのかな？	• 偏った資料にならないようにする。
	8	効果的な話し合いの進め方を学ぶ。 どうしたら目的に沿った話し合いになるかな？	• 「目と心で聴く」「伝わるように話す」ことも指導する。
	9	箇条書きでまとめたそれぞれの意見を聞き合って考えを深める。 説得力をもたせるためにどうしたらいいかな？	• よさを伝えてからアドバイスを行うように指導する。
	10	教科書の意見文を参考にして、わかりやすい意見文の書き方を学ぶ。 どんな文章構成がわかりやすいだろう？	①意見 ②根拠となる出事・資料 ③予想される反論 それに対する考え ④意見・まとめという文章構成を意識する。
	11	調べたり話し合ったりしたことで深まった考えを意見文に書く。 説得力が出るのはどんな表現かな？	• 具体的な資料を用いて書く。
	12	互いの意見文を読み合い、感想を交流する。 友だちの意見文のよさはどこだろう。	• 感想を付箋等で交換する。

3 本時の指導（3／12）

（1）本時の目標

「平和のとりでを築く」の資料を読み、筆者が伝えたいことを話し合う活動を通して、過去の事実や筆者の考えから未来の平和を築くために大切なことは何かということについて考えを広げたり深めたりすることができる。

（2）指導過程

段階	教員の働きかけと予想される子どもの活動	留意点
つかむ	○題名読みをする。 - 戦争に関係する話だと思うよ。 - 平和のために何かつくるんじゃないかな。 「とりで」って何だろう。 ○「平和のとりでを築く」の範読 CD を聞き、感想を交流する。 - 残された日記には、あの痛々しい産業奨励館だけが、いつまでも、おそるべき原爆のことを後世にうたえかけてくれるだろうー。と書かれていたというところが悲しかった。 - 痛ましい姿の原爆ドームは、原子爆弾が人間や都市にどんな惨害をもたらすかを私たちに無言で告げているところに共感した。 「戦争は人の心で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない。」って言葉が心に響いた。	「16 平和と公正をすべての人に」がSDGsの目標の一つであることを確認する。 - 心に残ったところを聞き合い、平和への思いを広げられるようにする。 - 第 2 時で聞いた静岡空襲のこととつなげ当事者意識をもって考えられるようにしたい。
追究する	○筆者が伝えたいことは何かについて話し合う。 - 争いをなくし、平和な世界にするためには、一人一人が心の中に平和のとりでを築かなければならないことを伝えたいんじゃないかな。 「平和のとりで」は、「戦争につながる悪い感情を正す強い心」だと言いたいんだと思う。 - 戦争を体験した人はもちろん、体験したことのない人も原爆ドームを見て、戦争の悲惨さを想像して、みんなが安心して暮らせる幸せな世の中を築いていかなければならないということだと思う。	- 筆者が平和を築くために大切だと思うことを知ることで、平和への考えを深められるようにしたい。 - 未来の平和のために、自分ができることについて向き合うことをねらいとする。
つなげる	○平和のとりでを築くために自分にできることを考える。	

4 授業の成果と課題

成果

- SDGsについての17の視点を先に与えることで、今、地球が直面している問題を分類し、整理して考えることができた。その大きなくくりから自分たちの身近な問題へとつなげ、「未来がよりよくあるために、今、自分にできることは何か。」ということについて真剣に向かい合うことができた。
- 静岡平和資料センターの方に静岡の地名や場所を具体的に交えて静岡空襲や清水空襲、戦時中の様子を話していただいたことで、どの子も自分事として捉え、「絶対に戦争をしてはいけない」という強い思いをもっていた。
- 資料「平和のとりでを築く」の読み取りで、静岡平和資料センターの方のお話ともつなげて読み取ることができていた。国連のユネスコ憲章の「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない。」という言葉に深く共感し、原爆ドームの姿や語り部さんの言葉を見たり聞いたりすることで、自分だけでなく、世界中の一人一人が平和のとりでを心に築いていく大切さについて話し合い深めることができた。

課題

- SDGsについての身近な具体例の精選が難しかった。
- 調べ学習の情報の検証ができなかったため、具体的な数値や例を文中にのせることができなかった。インターネット等で調べた「考えの根拠となる情報（例やデータ）」が正しいものかどうかを、どうやって検証していったらいいのかが大きな課題である。
- 今子どもたちの中にある思いを他教科や他領域と関連付けて実践できるようカリキュラムマネジメントをしていきたい。

5 資料等

【資料1】 静岡平和資料センターとの連携（第2時）

実際の地名を示しながら説明



絵を見せながら人々の様子を説明



板書

7/8(日) 静岡や清水にも空襲はあったのでしょうか? あやりの花火(ついで)!

戦争 人を人ではなくしてしまおう 戦争は人の中で生まれる

1941年
あやりに
ついで

B29 (はくたんをつんでいる)
日本の中でも多く落とされた
しついでに 10万発
(1200発)

1945年 6月20日 静岡で(こふく町) 2000人
7月7日 清水で(三保) 300人
7月31日 かんぱりしけき

1945年 戦争が終る
8月15日

はくたんが落とされる
人にあたる
家や人が燃える
焼く野原
(ゴフリット以外なくなる)

もともとのものに15年がうた

世の中の人達全員が平和で
明るい社会で暮らせるようにしたい

田中さんとお母さんの願い

みなさんは
何を
感じ
何を
思い
ましたか?

【資料2】「平和のとりでを築く」(第3時) 出典「光村」

本文



原子爆弾で破壊される前の建物

平和のとりでを築く

大牟田 静

広島市には、一帯の原子爆弾で破壊され、そのまゝの形で今日まで保存されてきた「原爆ドーム」とよばれる建物がある。この原爆ドームが、平和を築き、戦争をいまだけるための建造物として、ユネスコの世界遺産への仲間入りを果たしたとき、私は、建築されてからこの日まで、この地に生きた建物になつてきた年を思ひあつてはうれしかった。その年月は、私たちの父母や祖父母たちが生きてきた時代。そして、社会が激しく変わつていった時代と重なる。

「原爆ドーム」は、広島市の中心を流れる川のほとりに建っている。もともとは、物資陳列所として、一九一五年(大正四年)に完成した。ヨーロッパ出身の建築家が設計した鉄骨、レンガ造りの三層建てで、建物の真ん中には、四角形の九層塔(ドーム)が五階の高さにつき出ている。建てられた当時は、小さいながら、ひとさきめ目立つ建物だったといふ。

この建物は、広島を取り巻く時代の流れをしっかりと見てつてきた。この建物がかけを落とす川には、建物を運ぶ小舟が行きつた。夏になると、子どもたちが水遊びや水泳を楽しんでいた。また、小さな子どもの絵や書かれた作品展の会場としても、この建物は多くの市民に親しまれていた。



破壊した広島市街の様子

原爆ドームには、何よりも補強工事が急がれた。このことが新聞やテレビで伝えられると、全国から保存を願う手紙や寄付が次々と広島市に届けられるようになった。その後、補強工事は何度くり返され、今の形を保っている。

日本が一九九二年(平成四年)にユネスコの「世界遺産条約」に加盟した直後から、広島では、原爆ドームを世界遺産にしようという動きが高まった。そして、この動きは、たちまち全国へ広がっていった。この市民中心の活動は、原爆ドームが世界遺産に指定される一九九六年(平成八年)まで続いたのである。

世界遺産は、人間の歴史に大きな役割を果たした文化遺産と、地球上にある貴重な自然遺産を、未来へ向けて大切に守つていくために、ユネスコと世界の国々が調査し、指定していく制度である。エジプトのピラミッドや、ギリシャ

のオリンピック遺跡など、すでに六百か所以上が、世界遺産として手厚く保護されている。日本では、原爆ドームより前に、姫路城や屋久島などが選ばれている。

原爆ドームが、世界遺産の候補として審査を受けることになったとき、私は、ちよびり不安を覚えた。それは、原爆ドームが、戦争の被害を強調する遺跡であること、そして、規模が小さいうえ、歴史も浅い遺跡であることから、はたして世界の国々によって認められるだろうかと思つたからであつた。しかし、心配は無用だった。決定の知らせがといたとき、私は、世界の人々の、平和を求める気持ちの強さを改めて感じたのだ。

痛ましい雲の原爆ドームは、原子爆弾が人間や都市にどんな被害をもたらすかを私たちに無言で告げている。未来の世界で核兵器を二度と使つてはいけな、いや、核兵器はむしろ必要だ。と、世界の人々に警告する記念碑なのである。

国連のユネスコ憲章には、「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」と記されている。原爆ドームは、それを見る人の心に平和のとりでを築くための世界の遺産なのだ。



【資料3】子どもの意見文より抜粋（第11時）

A「差別という名の悪の心」

- 未来がよりよくあるために、人や国との不平等をなくすことが大切だ。いわゆる差別だ。差別がなくなれば未来はよりよくなると思う。

B「食べない分を食べられない人へ」

- 飢餓のない世界。これは、飢餓で苦しむ人が食べ物に困らず普通に暮らすために欠かせないことだ。そのために、私たち一人一人の食べない分を食べられない人へという意識、これが飢餓のない世界への第一歩だと考える。

C「好きなことができる未来」

- 男女差別のない未来。これは、すべての人が自分の好きなことをするために欠かせないことだ。そのためには、どんなことでもみんなで協力することが大切だと考える。

◇ 2年間の研究をふり返って

私は今まで「国際連帯教育」と「平和教育」という捉えでいました。しかし、共同研究者から国際連帯と平和教育研究委員会で考え実践したいことを伺い、『『連帯と平和』教育』であることを理解することができました。この二つは深くつながり合っていて、切り離せない関係なのです。紛争や戦争の原因となる問題をよく考えてみると、貧困や飢餓、差別等、確かに、SDGsに示されている17の問題にあてはまります。その原因をなくすには、国同士が共に手を取り合って、よりよい未来にするために話し合っ解決していくしかないのです。そして、それを実現するためには、一人一人の地道な一歩が大切だということを、この実践を通して学ぶことができました。

2年間で、様々な実践を聞き、平和教育を広い視野で考えることができるようになりました。これからも、過去から学び、平和な未来を築くことのできる子の育成を目指し、日々研修を重ねていきたいと思っています。

戦争の悲惨さについて考える ～沖縄戦から～

現在の日本社会で生活していると、「戦争」は無縁に近い存在のように感じますし、日本人にとって、戦争の記憶が少しずつ風化しているように思います。子どもたちに聞いても、なかなか当時の様子を想像することができなくなってきたのではないのでしょうか？

ただ、戦争の悲惨さや残酷さを忘れず、二度と戦争のない世の中にしていくにはどうしたらいいか考えていくことこそ、グローバル社会を生きていく私たちに必要なことと考え、実践を試みました。

◇ 授業の具体

社会科学習指導案

指導者 小林 義幸（熱海市立多賀小学校）

1 単元名 長く続いた戦争と人々の暮らし ～沖縄戦から考える～

2 単元目標

日中戦争や太平洋戦争の経緯やその様子、戦時中の人々の生活について調べ、日本が戦時体制に移行していったことや大きな被害を被ったこと、我が国が多く国々、とりわけアジア諸国の人々に対して多大な損害を与えてしまったことがわかる。また、第二次世界大戦が起こった原因や当時の事象について、多面的・多角的に考察する。

3 本時の目標

（1）本時の目標

戦争はよくないと考えているが、戦時中の生活を知らない子どもたちが、沖縄戦の様子を写真や実話集などを見聞することで、戦争の悲惨さや酷さを知り、戦争のない世の中がいかに大切か考えることができる。

（2）指導過程

予想される子どもの活動と教師の働きかけ	※留意点 及び評価
この数字は何が起きた日かわかりますか？ ・ 8. 6 ・ 8. 9 ・ 6. 23 ・ 8 月 6 日は広島に原爆が落とされた日です。 ・ 8 月 9 日は長崎に原爆が投下された日でした。 ・ 6 月 23 日は何だろう？ ・ 教科書に沖縄戦が終了した日であると書いてあったよ。	※ 8 月 15 日には、甲子園でもサイレンが鳴り、黙祷を捧げていたことを伝える。

予想される子どもの活動と教師の働きかけ	※留意点 及び評価
戦争についてどんなイメージをもっていますか？ ・血が吹き飛ぶ。 ・ミサイルで家や木、建物が吹き飛ぶ。 沖縄での戦争の様子はどのようなものだったのでしょうか？ ・あまりにも残酷。 ・関係のない一般の市民まで死んでいるなんて知らなかった。 ・日本の軍隊が木で飛行機や戦車などを作っているなんて知らなかった。もう戦う力なんて残っていない。 ・アメリカ軍に捕まるぐらいなら、自決していたなんて…。あまりにもひどい。 ・友達や部隊に戻ろうとした兵隊が、爆撃で一瞬に亡くなったなんて…。しかも、脳みそや内臓が飛び出ているなんて…。絶対見たくない。 沖縄戦の様子を聞いて、戦争についてどう思いましたか。 ・二度とこのような戦争を起こしてはならない。 ・こんなにも悲惨なのに、なぜ世の中から戦争がなくならないのか。	※子どもたちの発言を大切にする。 ※写真や実体験の中には、想像を絶するものがあるので児童の精神面を十分配慮し資料を提示する。 【評価】 戦争の悲惨さや残酷さを理解している。 (知識理解) <観察> 【評価】 戦争のない世の中がいかに大切かを考えることができる。 (思考・判断・表現) <プリント> ※最後に教員の祖父の戦時体験を話し、身近にも悲しい思いをしている一家族がいることを伝える。

【出典】

- ・「ひめゆり平和祈念資料館」 財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会
- ・「記録写真集 沖縄戦 ～太平洋戦争最後の死闘 90 日～」 那覇出版社

4 授業後の反省と評価

成果

- ・日本が朝鮮や中国を侵略し、同じように傷つけてきた事実を知らない子どもたちが多かった。だからこそ、この単元で、しっかりと歴史を学習することが大切であることを実感できた。
- ・子どもたちの中で漠然としていた「戦争」のイメージが、写真や体験談など具体的な教材を用いることで、その悲惨さや酷さを知ることができた。「二度と起こしてはならない」という強い気持ちをもつことができた。
- ・「なぜ、このような悲惨な戦争をするのか」と疑問に思う子どもがいた。このような疑問を取り上げ、学習を進めていくことができると考える。この単元の導入に活用できることがわかった。

子どもの感想より

- A 「2度とあってはいけない。」と聞いたことはありましたが、こんなにもひどいことが実際に起きていたんだと考えるだけでおそろしいし、とても怖いです。戦地にいた人は本当に怖いどころじゃなかったんだと思い、悲しくなりました。

- B 今日の話はものすごくつらそうだなと思いました。今ある世界が日本は平和でも他の国で戦争をしている所もあると思うと悲しいと思いました。脳が飛び出したり、腸が出ていたりした人もいて痛かっただろうし、つらかったと思います。もうこんなふうには戦争を起こさないでほしいと心から思いました。こんな戦争で死んでしまった人たちはものすごくつらいと思いました。もう二度とこんなふうには死んでしまった人たちを増やしたくないです。
- C 今まで思っていた戦争もひどいとは思っていたけれど、先生の話聞いて、これまでない思いも出てきました。そして、体験した沖縄の人の苦しみもわかった気がしました。これから体験した人の苦しみや悲しみを黙とうで私も祈りたいと思います。戦争の原因をなくしたいと思います。
- D 自分の身を守りたいからといって、他の人を死なせてしまうのは、その人の気持ちを考えていなくてひどいと思いました。なぜ戦争をし始めたのかもよくわからず、おかしいと思いました。

課題

- ・あまりに残酷な話であるので、どこまで伝えたらいいのか判断に迷った。
(話を聞いて気分が悪くなったり、トラウマになったりする子どもがいるのではないかと
いう懸念)
- ・しかし、具体的な写真や体験談を伝えていかないと、戦争の悲惨さや酷さが伝わらない。
具体的な事実をどこまで提示したらよいのかは課題である。
- ・少ない授業時間の中で、どのように子どもたちに平和の大切さを実感させるかが鍵となる。
改めて、単元計画が大切になると感じた。

◇ 2年間の研究をふり返って

国際連帯と平和研究委員会の2年間は、「平和」ということを常に考えさせられた。現在、「自分事」がキーワードとなっているが、「平和」についてどれだけ「他人事」を「自分事」に感じられるかが大切だと感じた。

「自分だけが幸せであればいい」という子どもたちではなく、「みんなが幸せになるために」という考えをもった子どもたちを育てていきたい。そのためには、教員が「共生社会の実現」や「争いごとを平和的に解決すること」の必要性を常に意識して、日々の教育活動を実践していきたい。



新しい時代に向けたゆたかな学びの実現 ～ SDGs に着目した学びから～

※ 本報告は、研究委員会の中で報告された実践であるとともに、2020 年 1 月の日教組第 69 次教育研究全国集会において報告されたものです。そのため、他の所員の報告とは項の起し方等が異なります。

- 1 研究テーマ
- 2 テーマ設定の理由
- 3 研究仮説
- 4 実践
 - (1) 世界の国々を紹介しよう
 - (2) 「飢餓に苦しむ子どもたちを救うには？」SDGs 目標 2：飢餓をなくそう
 - (3) 写真を読みとろう
 - (4) 今後の授業実践予定（SDGs の視点から）
- 5 成果と課題
 - (1) 成果
 - (2) 課題
- 6 おわりに

吉永さくら（沼津市立愛鷹中学校）

1 研究テーマ

「新しい時代に向けたゆたかな学びの実現」

～SDGsに着目した学びから～

2 テーマ設定の理由

SDGsとは、「Sustainable Development Goals」の略である。2016年1月から2030年まで、15年間にわたり掲げられる国際目標で、2015年9月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」にて記載されている。持続可能な世界を実現するための17のゴール・169のターゲット、232の指標から構成されており、地球上の誰一人としてとり残さないことを誓っている点が特長である。発展途上国だけでなく、先進国が普遍的にとりくむべき目標であることから、日本でも政府や企業、多くの団体がさまざまなとりくみを展開し、社会全体で注目されている。このような状況の中、SDGsの推進および実施は「学びの場」としても注目すべきだと考えている。本校のグランドデザインの「めざす愛鷹中生の姿」に、「人の話をしっかり聴き、自分の思いや考えを素直に表現できる人」、「相手を思いやる言動ができ、役立つ喜びを感じられる人」、「自他の命を大切にし、めあてに向かって忍耐強くとりくむ人」とある。それらの実現に向けて、さまざまな教科・領域で研究をすすめてきた。

ある日、給食中の放送でK-Popが流れ、Aが「韓国は嫌い！北朝鮮なんてもっとおかしい！」と強く班員に話をしていて。それに対してBが「韓国や北朝鮮のどこが嫌いなの？」と質問した。Aは「韓国は日本に対して嫌なことばかりしてくるし、北朝鮮はミサイルばかり撃ってくるから頭がおかしい！」そこにCが「アメリカも戦争好きだよ。銃社会だし。」と話していた。給食中の何気ない会話の中で起こったことである。学級全体は明るく元気で男女ともに仲が良い。グループ活動でも臆することなく自分の意見を言える雰囲気があり、授業にも積極的にとりくむ姿勢が見られる。しかし、14歳の子どもがメディアやSNSの影響により、断片的に物事を捉えて、国や人種に対する偏見を顕わにしたことに衝撃を覚えた。物事を多角的に捉え、正しい知識で判断して考える大切さを伝えていかなければ、思いやりのない、考えの偏った、自分ファーストな人間が創造されていくのではないかという不安から本研究は始まった。

オックスフォード大学、マイケルA・オズボーン博士の論文「未来の雇用」によれば、2030年までに米国の総雇用者の約47%の仕事がAIによって自動化されるリスクが高いとある。コンピュータによる技術革新がすさまじい勢いですすむ中、職業までもが消えてしまう現実が目前とされている。その激しい社会の中で子どもたちが生き抜くためには、多角的な視野から物事を考え、自分の考えや意見を創造し、外に発信していかなければならないと考える。さらに、世界にもっと目を向け、今、世界で何が起きているかを知る必要がある。だからこそ、SDGsに視点をあて、本研究にとりくむこととした。

3 研究仮説

SDGsの視点を授業にとりいれ、世界情勢の現状を知ることで、世界に対する認識や関心を高め、地球市民としての視野で自分の考えをもつことができるのではないか。

4 実践

日頃の外国語の授業では「聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮」することを大切にしている。他者に配慮することは、外国語の学習を通して、他者を受け入れる寛容の精神や平和・国際貢献などの精神を獲得し、多面的思考ができるような人物を育てることにつながる。グローバル

化がすすみ、さまざまな地球規模の問題が深刻化する中で、世界の多様な文化や国の様子に触れて考えることは、国際社会を生きる子どもたちにとって必要不可欠なことである。また、学習指導要領外国語科の目標には(3)「外国語の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う」とある。「外国語の背景にある文化に対する理解を深め」ることは、世界の中の日本人としての自覚をもち、国際的視野に立って、世界の平和と人類の幸福に貢献することにつながるものだと考える。

(1) 授業実践1(英語) 中学1年(男子17人、女子12人)

「世界の国々を紹介しよう」

①ねらい

日本や英語圏の国々にしか興味をもたなかった子どもが、エキスパートグループに分かれ、フィンランド、オーストラリア、イエメン、ガーナに関する資料をもとに、各国の現状や特徴・良さを知る。ジグソーグループに戻った際、各国大使館の一員になったつもりで、写真などを用いてその国の魅力を英語で伝えることができる。

②指導過程

各国大使館の一員になったつもりで、写真やワークシートの資料を用いて、その国の魅力を英語で伝える活動にとりくんだ。7つのエキスパートグループに分かれ、A～Dそれぞれの国(A:フィンランド、B:オーストラリア、C:イエメン、D:ガーナ)の良い点や特徴について意見を出し合い、どのように英語で伝えていくかを話し合った。黒板に世界地図を掲示して、それぞれの国の位置を明確にしたり、難しい単語は予め英語で示すとともに、紹介文に使える表現を資料に盛り込んだりすることで、たくさんの意見を引き出せるようにした。その後、各エキスパートグループで考えた各国の魅力をジグソーグループ(4人班×6、5人班×1)に戻って伝え合った。その上で自分が紹介したい魅力ある国を1つ選び、全体に発表して意見を共有した。クロストークすることで、仲間の意見を聞き、自分の考えと関連性や共通点の有無を考える機会とした。

③子どものあらわれ

ア 自分が紹介したい魅力ある国を1つ選んだ理由

○フィンランド(10人)

- ・オーロラがきれいでムーミンが有名でサウナも人気だから素敵だ。
- ・話されている言語がフィンランド語だと知った。

○イエメン(8人)

- ・自然豊かな所は日本に似ているが、天然ガスや石油が日本ではとれない。
- ・治安が悪いことが気になった。テロが多いようなので危険だと思った。
- ・国の人々が豊かだから、貧しい人がいないことが良い。

○ガーナ(5人)

- ・気候に興味があった。歴史的遺産が多くあるところが日本に似ている。
- ・カカオが特産物なのに、有名な料理にカカオを使っていないのはなぜ？

○オーストラリア(3人)

- ・他の国の面積は日本よりも小さいか同じくらいだけど、オーストラリアは日本

よりとても大きい。四季が逆で特徴的だった。

- ・国の面積は大きいけれど、人口が少ない。移住者が集まってできた国だな。

イ 授業後の感想

- ・文章を書くときに、自分の知識で内容を追加したりアレンジしたりしてその国の魅力を詳しく伝えられてよかった。
- ・先生や仲間の力を借りながら、友だちと楽しくたくさんを知ることができた。
- ・キリスト教の国が多く、英語以外の言語もたくさんあることがわかった。
- ・知らない国々のことを知らない単語をみんなで話し合っていていくうちに、たくさんを発見できた。各国の特徴の違いはあるけれど、それぞれの良さがあっておもしろかった。
- ・世界の国々に対して、これからもどんどん知識を増やしていきたい。

④授業実践 1 を通して

子どもたちは、英語圏の国々のことについての知識をある程度もち合わせていたが、あまり認知されていない国が選択肢に含まれていたことで、今まで知らなかった知識を獲得することができてうれしそうだった。さらに、各国の特徴を知り日本と比較することで、違いに気づき、考えの幅が広がったようだった。地理の授業で既習済みの事柄もあり教科横断的な活動ができた。また、イエメンやガーナは貧しく、危険なイメージをもちやすい国であるが、子どもたちは他の観点到に興味を抱いたことに驚いた。ジグソー活動を取り入れたことで、他者と協力して活動にとりくむだけでなく、意見を共有し合うことで考え方の幅や価値観が広がったように思えた。

今回は世界幸福度ランキングを提示しなかった。ランキングによる負のイメージから、その国の良さが見えなくなり、悪いイメージをもってしまうことなどを懸念したためだ。しかし、ランキングを提示した際に子どもたちの考え方にどのような変容が起こるのか興味が残った。

(2) 授業実践 2 (学活) 中学 2 年 (男子 17 人、女子 13 人)

「飢餓に苦しむ子どもたちを救うには？」SDGs 目標 2：飢餓をなくそう

①ねらい

1 年次の英語の授業「世界の国々を紹介しよう」、道徳の授業「あたりまえ」ではなく「ありがたい」こと（主題名：人類の幸福への貢献）、社会の授業で「持続可能な社会」や世界全体の地理的な特色を知るなど、子どもたちはさまざまな教科領域で世界に関係する学習を積み重ねて国際的な視野を広げてきた。さらに英語「Program 3 What Can We do For Others?」でチャリティー（慈善事業）について学習しながら「We are the world U.S.A for Africa」を通して、アフリカの飢餓についても学んでいる。これらを踏まえ、子どもたちが気付いていないイエメンが抱える課題に焦点を当て、意見交流させることで、国際的な視野に立って世界を見つめ、平和と幸福に貢献する心情を養う。

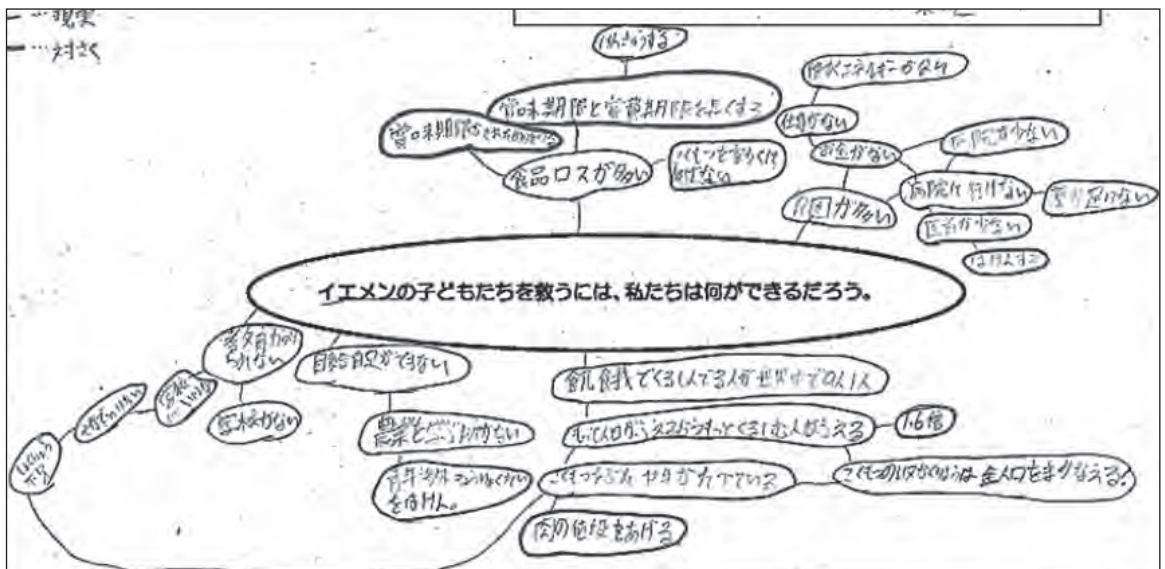
②指導過程

SDGs (持続可能な開発目標) について YouTube の動画 (BBC ニュースを含む) を使って理解が深まるようにした。特に、目標 2:「飢餓をゼロに」を重点とした。その後、セーブ・ザ・チルドレンが提供している資料「この国はどこでしょう？」クイズを行った。スラ

イドを見て、イエメンの子どもたちの現状について知った。その後、国連 WFP の資料、世界の飢餓地図（Hunger Map 2018）を見て、意見を出し合った。そして、思考ツールの一つである「ウェビング」を用いて、イエメンの子どもたちを救うには、私たちは何ができるかを考えた。それぞれが考えたウェビングをもとに、班や全体で考えを共有した。それを踏まえ、付箋を用いて考えを整理しながら「なぜ、世界の中で、飢餓に苦しむ子どもたちがいるのだろうか？」についてグループで考え、まとめた意見を全体で共有した。

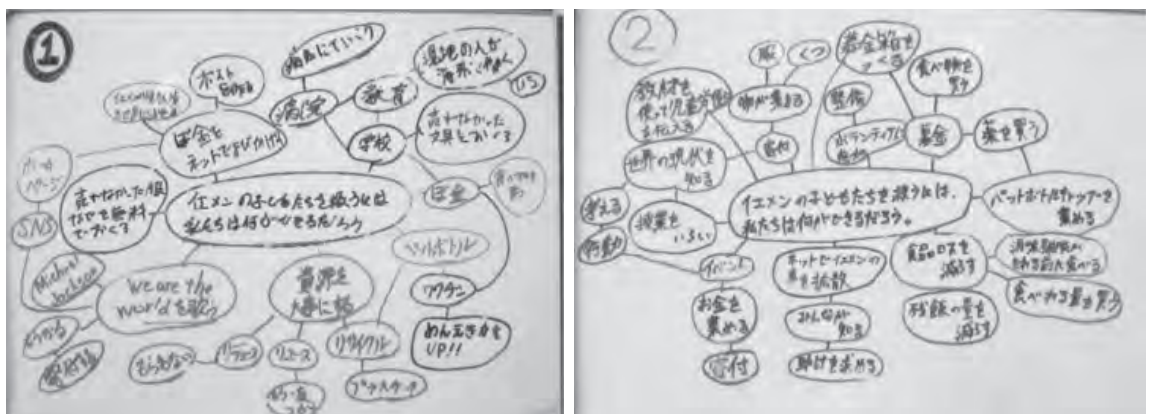
③子どものあらわれ（振り返り）

ア 第1時



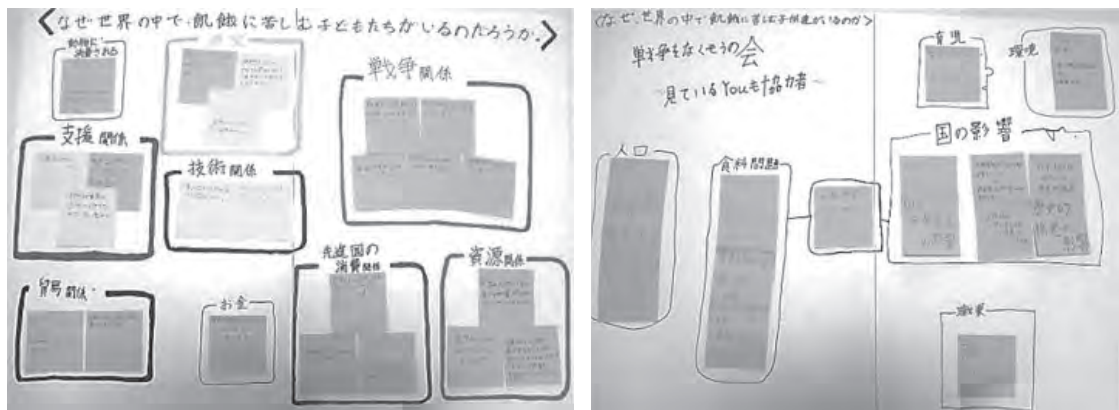
- ・イエメンの教室には女子が少ないし男子ばかりだ。女子は家で家事をやるから学校に行けないのかな。机が一人ひとつではなく、3人で共有している。狭そうだ。
- ・イエメンに対して昨年度までは肯定的に捉えていたが、実際の現状を知り、驚いた。世界の中で、こんなにも厳しい状況の中で生きている子どもたちがいることを知った。

イ 第2時



- ・日本は教育が受けられるから、お金をたくさん稼げるのかな。
- ・そもそもなぜ戦争はなくなるのか、なんで戦争は起こるのか、世界の首脳会議とかがあるのになぜこの問題に対して、世界のリーダーたちは向き合わないのか。
- ・いっそのこと、医療の発達している国に貧困の人々や病人、怪我人を移動させてみては？でも輸送費にお金がかかる。受け入れ先はあるのか。搬送中に銃弾を受けるかもしれない。戦争に巻き込まれるかもしれない。

ウ 第3時



- ・思っていたよりも、世界には貧しい国があるということがわかった。貧困の理由は、経済的な問題だけでなく戦争も大きく関係しているということも知った。世界の子どもが自分たちと同じような暮らしができるように、できることからしてみようと思った。
- ・イエメンの子どもたちの現状を動画で見て2030年に向けての持続可能な世界目標の貧困をなくそうと飢餓をなくそうについて特に考えたら今の発展途上国の問題や世界の問題点を見つけられてよかった。これからは募金やペットボトルを集めて少しでも多くの人の命を救いたい。
- ・世界に飢餓の人があんなに多いとは知らず驚いた。将来飢餓の人をなくすためにも今から協力できることに参加したいと思った。将来、同年代やそれ以下の多くの子どもと共に歩むために食糧問題や国際問題を支援していくことに興味が湧き、僕は間接的でも世界の人々を平等に格差なく生活できる世の中にする仕事に就きたいと思った。

④授業実践2を通して

SDGsについてどの教科で具体的に何ができるのか不明瞭だが、SDGsの視点を意識した上で授業をしていけばいいのではないかと考えた。

所員からは、身近ではないイエメンという国を選ぶことで、私たちにできることに現実味がなく、思考の範囲が限られてしまうのではないかという意見があった。さらに、国別になっているデータは平均化されているため、そのまま信用してはいけないという指摘もあった。中国ひとつを見ても地域差が大きく、1つの数値では表現できない状況があるからだ。

(3) 授業実践3 (英語) 中学2年 (男子17人、女子12人)

「Program 7-2 人やものの様子や状態について言うことができる。」

「Program 7-3 だれかに何かを与えるということを行うことができる。」

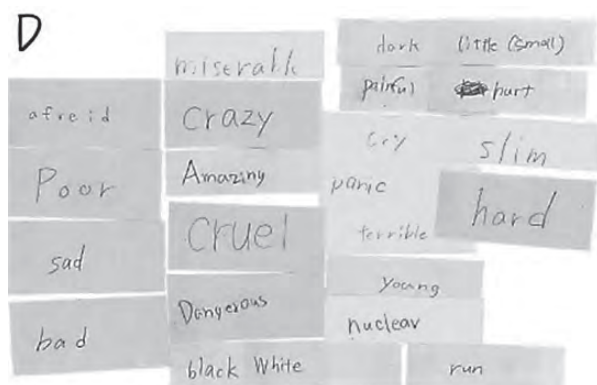
①ねらい

本文にはセヴァン・カリス＝スズキさんやマハトマ・ガンディーさんの言葉についてとりあげられている。当時12歳だったセヴァン・カリスさんは、1992年にリオデジャネイロで開かれた地球サミットにおいて、世界に環境保全を訴える伝説のスピーチをした。その実際の映像を見ることで、映像から伝わってくる彼女の表情や切実な思いを感じ取り、メッセージ性を読みとっていく。セヴァンさんの成長を追いながら、環境破壊をはじめとする、さまざまな問題を解決するために努力する姿を見て、自分の将来の生き方を考える良い機会となることを期待する。さらに、2019年10月、15歳のグレタ・トゥンベリさんによる国連気候行動サミットでの衝撃的なスピーチも併せて紹介して意識を高めていきたい。英語だけでなくSDGsの視点からも活動にとりくめるよう、SDGsの目標1、2、6などに着目させたい。

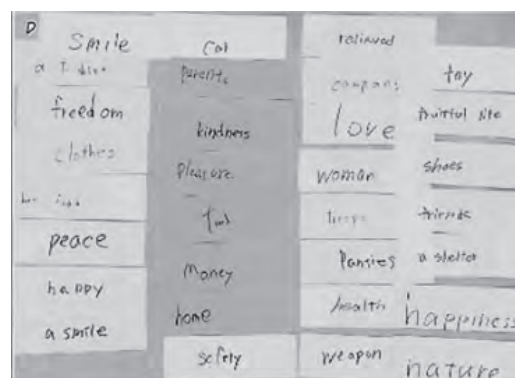
②指導過程

6枚の写真(貧困問題、ラグビー、ユニセフ等)を見て、それぞれの写真はどのように見えるか、そして彼らに私たちは何を与えることができるのか、グループで辞書や教科書を用いて形容詞や名詞を調べ、付箋に単語を書き出して全体で共有した。書き出した単語をセクション2、3の文法事項look + 形容詞「～に見える」、give + 人(A) + もの(B)「(A)人に(B)を与える」に用いた。

③子どものあらわれ



(7-2) This picture looks 形容詞



(7-3) We will give them 名詞

④授業実践3を通して

子ども一人ひとりによって写真のとらえ方が異なり興味深かった。これまで継続して実践してきたことや、合唱コンクールで「HEIWAの鐘」を歌った影響もあるのか、戦争や平和に対する思いが以前よりも一段と強くなった気がした。何かを与えるという部分では、ものだけでなく「笑顔、思いやり、自由、平和、愛情」など抽象的なものも上げられた。その反面、「weapon 武器」という単語が出てきた際、武器は武器で解決すべきだという意見もあったので、暴力や力を使わず、平和的に解決する力を子どもたちに育てる教育を今後も模索していく必要があると感じた。

(4) 今後の授業実践予定 (SDGs の視点から)

① Program 7 What Is the Most Important Thing to You? (中学 3 年)

目標 13：機構変動に具体的な対策を

国際協力師として世界中でボランティア活動を行っている山本敏晴さんの話。ツバルとルーマニアの子どもたちの絵に込められたメッセージを題材に、本当の国際協力とは何か、また、私たち一人ひとりに何ができるのかを考える。

② Program 8 Clean Energy Sources (中学 3 年)

目標 7：エネルギーをみんなにそしてクリーンに

2011 年 3 月 11 日に起きた東日本大震災を切り口に、エネルギーの大切さに気付く。波力、地熱発電のような再生可能エネルギーを利用した発電の特徴を学ぶ。

③ Program 9 Education First : Malala' s Story (中学 3 年)

目標 4：質の高い教育をみんなに

目標 5：ジェンダー平等を実現しよう

16 歳の誕生日に、すべての子どもに教育の権利を求めて国連でスピーチをしたマララさんの話。世界の子どもの教育の現状、教育の重要性、男女平等、自他の敬愛の大切さを学ぶとともに、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養う。また、ノーベル平和賞など、彼女の平和教育運動へのとりくみも知る。

5 成果と課題

(1) 成 果

SDGs の視点を授業にとりいれ、世界の「今」を知ることで、世界に対する認識や関心が確実に高まっていく姿を見られたことが成果として挙げられる。子どものふり返りを分析すると、貧困や紛争に対する概念が不明瞭だった子が、実情を知ること、自分なりの考えや価値観を創造するきっかけとなったことが推測できた。本研究は中学 1 年から 3 年にかけて系統立てて実践をしていく計画であるため、来年度も単元の中に SDGs の視点を意識した授業を実践していく。子どもたちから、児童労働問題、人間の平等、安全で清潔な水を供給するなどの実態を踏まえた意見が出され、当初の目標 2「飢餓をゼロに」以外にも多くのことを感じとったことがうかがえた。実践当初は、戦争や紛争の現状、飢餓で苦しんでいる子どもや国々の実態を映像や写真で提示することに戸惑いがあったが、事実を目を向けたからこそ子どもたちの学びが広がったといえる。さらに、SDGs の 1 つの目標に特化して考える場合でも、他の目標につながる部分をもち合わせていることを実感した。これらの学習が子どもたちの日常生活の中で、少しでも日本情勢や世界情勢に目を向けるきっかけとなってくれることを願うばかりである。

(2) 課 題

SDGs の視点を意識することで、多くの成果が挙げられたが、実践ができていないクラスとできていないクラスを比較してみると、国際社会の課題に対する意識の変容が大きく異なった。研究をすすめるなかで、SDGs の目標の大切さを感じるとともに、教員が正しい知識を習得し、教材に対しての見識を深める必要性を感じた。また、SDGs をどのように授業にとり入れるかが明確になっていないからこそ、教員が SDGs の視点を意識し、明確な意図をもって授業を行わなければ、これらの実践は成立しないだろう。

6 おわりに

子どもたちと同様、私自身も他の国々の状況等や国際的な課題、国際連帯の必要性についての興味・関心・理解は十分ではなかった。おとなも子どもも、もっと世界のことに意識や関心をもつことが求められるのではないか。世界中が共生していくためには、やはり「違いを認め尊重すること」「多面的なものの見方や考え方」が必要である。英語の授業だけでなく、道徳や社会など他教科等とのつながりも意識しながら、地球市民の一人として教員も子どもと一緒にあるべき生き方を学ぶ姿勢を大切にしていきたい。

私としては試行的な実践であったが、子どもたちの学びは私の予想を超え、改めて教育の力を感じた。授業にとりくむためには、授業者の正しい知識の習得と、教材に対しての見識を深めなくてはならない。そうでないと子どもたちに間違っただけを教えることになる。インターネットが発達したことにより、世の中は大変便利になった。いつでも、どこでも、だれでも簡単に国内外の情報を手に入れられる時代である。おとなも子どもも、ネットニュースやテレビ番組、新聞記事などメディアからのメッセージを鵜呑みにせず、どんな意図で作られ、送りだされているかを自分の頭で判断する力「メディアリテラシー」を養っていく必要も感じた。

子どもたちは、学年に応じSDGsを通して国際連帯を意識した学びを積み重ねていくことで、自然と多面的に物事を考えられるようになっていくだろう。これから、子どもたちがどういう学びを積み重ねていくかを想像し、その先の未来はどうなるだろうかなどを想像すると、子どもたちの成長への期待とともに、私自身楽しみを覚える。

【 出 典 】

- ・【外務省×SDGs】 どれから始める？ 未来のために （外務省）
- ・SDGs NOW! 17 Goals to Transform Our World （外務省）
- ・子ども・若者向けのハンドブック『私たちが目指す世界 子どものための「持続可能な開発目標（SDGs）」』日本語版（Save the Children／セーブ・ザ・チルドレン）
- ・SDGsの目標が一覧できるリーフレット（Save the Children／セーブ・ザ・チルドレン）
- ・World Food Programme Hunger Map 2018
- ・SUNSHINE ENGLISH COURSE 2, 3（開隆堂）

2年間の研究をふり返って

1 「国際連帯と平和教育研究委員会」の押さえと研究内容

教育研究所は、1983年に「平和教育研究委員会」を立ち上げて以来、平和教育について研究実践を重ねてきました。現在では、国際連帯と平和教育研究委員会と名称を変え、「いつでも、どこでも、だれでもできる平和教育」を合言葉に、現場での教育実践に努めています。

平和教育と言うと、反戦平和教育というイメージが強いのですが、平和を広く解釈し、子どもや大人が安心して豊かに人間らしい生活ができる社会であることを願い、そのためには平和教育の教育実践はどうあったらよいかを考え研究をすすめてきました。

教育研究所が押さえる平和教育の中身を示し整理すると、下の図のようになります。

①反戦教育を主軸としたいわゆる平和教育

戦争の悲惨さや惨状、戦争が引き起こす重大な人権侵害や生命の危機等を学び、戦争は絶対に起こしてはならないという教育

平和教育

②もう一つの平和教育

学校や学級、地域社会では争いや対立が起こることを前提に、その争いや対立を暴力や力を使わないで平和的に解決する子どもを育てる教育

③国際連帯の教育

地球的問題群（気候変動の問題、環境問題、食糧問題、飢餓と貧困問題、格差の問題等）を題材とし、その問題を自分ごととして認識し、問題の原因や解決策等を考え、国際連帯の重要性や必要性を学ぶ教育

「地球的問題群」とは、本研究委員会の共同研究者である伊藤恭彦先生が提唱した言葉です。

2 実践と考察

7人の所員による2年間の授業実践の実績は、次のとおりです。

①反戦教育を主軸としたいわゆる平和教育…4本

反戦教育を主軸とした平和教育は、国語、社会、学級活動、図工の授業実践でした。図工での反戦平和教育は、図工の「鑑賞」という学習を通して実践されました。学級活動での実践は、戦時中の食生活を通して戦争を考えるという学習で、当時の生活をゲストティーチャーに語っていただき、戦争の悲惨さや大変さを学習するものでした。

②もう一つの平和教育…4本

実践の4つは、道徳と学級活動でした。

道徳の実践は、「相互理解、寛容」、「友情、信頼」、「規則の尊重」という価値項目を扱った授業でした。互いに理解し合う、互いに信頼し合う、規則を守り秩序を保つという学習を通して、争いや対立を力や暴力を使わないで平和的に解決する子を育てたいという願いに基づいた実践でした。学級内での争いや友達どうしのトラブルなどは、集団生活を送る学校ではごく自然に起こり得ることで、争いや対立を暴力や力を使わないで平和的に解決する子どもたちに育てたいという願いは、教職員誰もがもっています。このような子どもたちに育てるためには、相互理解、寛容の精神、相互の信頼等はその基盤となるものではないでしょうか。

その意味で、道徳の学習を通して、平和教育を実践することには大きな意義があります。

③国際連帯の教育… 4 本

国際連帯の教育の実践の 4 本は、2015 年に国連で採択をされた SDGs（持続可能な開発目標）の視点を取り入れたものでした。

給食という子どもたちにとって身近な場면을題材にし、SDGs の視点（目標 12 のターゲット 3）を単元計画に組み入れ残飯、フードロスを考えるという実践でした。SDGs の視点を入れたことにより、世界には飢餓や貧困に苦しみ、貧しい食生活の中で生活している子どもたちがいることを通して世界中には自分たちには考えられないような状況があることを認識し、今の自分たちの豊かな状況を考えるという実践でした。

3 実践研究を通して見えてきたこと

（1）平和教育実践のためのカリキュラムマネジメントを

2018～2019 年度の実践の中で、着目したい実践がありました。それは、下の図にあるように 1 年間の教科、領域のカリキュラムを概観し、その中で平和教育として実践できる教科、教材を洗い出し、時期や学校行事との関連を考え、系統性や計画性をもって継続的に平和教育を実践したものでした。平和教育実践のためのカリキュラムマネジメントと言えます。平和教育の実践にとりくむ際には大いに参考にしたいものです。

手立 月	(1)学級経営と道徳における平和教育の視点	(2)戦争や SDGs について考えられるような題材を扱った実践
4・5	聴き方指導・あった言葉の推奨（年間） 考える道徳「まどさんからの手紙～こどもたちへ～ （よりよく生きる喜び）」	理科「わたしたちの生活と環境」 理科「ものの燃え方」
6・7	考える道徳 「みんなおかしいよ！（相互理解・寛容）」他	理科「生物どうしの関わり」 国語「未来がよりよくあるために」
8・9	考える道徳：いじめについて考えよう 「泣き虫（公正・公平・社会正義）」 「今度は、ぼくの番（親切・思いやり）」他	夏休みの課題 意見文【平和祈念式典をみて】
10・11	考える道徳 「どうすればいいの？（相互理解・寛容）」他	社会「戦争と人々の暮らし」
12・1	考える道徳：国際親善について考えよう 「五十五年目の恩返し（感謝）」 「ブータンに日本の農業を（国際理解・国際親善）」他	社会「平和で豊かな暮らしを目指して」
2・3	考える道徳：差別のない社会について考えよう 「私には夢がある（公正・公平・社会正義）」 「エルトゥールル号（国際理解・国際親善）」	理科「生物と地球環境」 アンケート 【平和について】

（2）SDGs の視点を取り入れた平和教育の実践を

国際連帯と平和教育研究委員会は、2010 年度から 2013 年度までの 4 年間、共同研究者である伊藤恭彦先生が提唱した地球的問題群を題材にした実践を研究しました。それは、この問題について知り考え学ぶことが、実は平和教育の一つであるという理由からです。

2018 年度、2019 年度の研究では、この問題の重要性と平和教育として必要であることを再認識して研究をすすめました。折しも、SDGs が注目を浴び、学習指導要領にも一定の記述がされました。伊藤先生からは、SDGs についてレクチャーを受けました。

世界では、日本では考えられないようなことが起こっています。その犠牲になるのは多くの場合子どもたちです。子どもたちの未来を希望あるものにするために、子どもたちも、教職員も世界の状況を知り、考え、国際連帯の重要性や必要性を学ぶことが求められます。

国際連帯と平和教育研究委員会（2018～2019年度）

共同研究者

伊藤 恭彦（名古屋市立大学 教授）2018～2019

研究協力者

加治 宏基（愛知大学 准教授）2019

所 員

西井 知美（静岡教組）2018～2019

池谷 崇仁（浜松教組）2018～2019

小菅 知章（賀茂支部）2018～2019

小林 義幸（東豆支部）2018～2019

吉永さくら（沼津支部）2018～2019

馬場 誠也（富士支部）2018～2019

寺島健太郎（志太支部）2017～2019

事務局

大石 茂生 2018～2019

小野 佳貴 2018

佐野 友美 2019

赤堀 真人 2018～2019

ものごとを平和的に解決する子どもたちを育てるために

～3つの視点による平和教育実践集～

編集・発行／静岡県教職員組合立教育研究所「国際連帯と平和教育研究委員会」

〒420-0856 静岡市葵区駿府町1番12号 静岡県教育会館

発 行 者／教育研究所運営委員長 鈴木伸昭

発 行 日／2020年1月

<http://www.stu.jp/>

最後までお読みいただきありがとうございました。この所報をお読みになったご意見・ご感想をお聞かせください。皆さんからいただいたご意見・ご感想は、今後の研究活動や成果発信に生かします。

STU Institute of Educational Research
静岡県教職員組合立教育研究所
FAX: 054-255-5110
Mail: sier@stu.or.jp (ご意見専用研究所メールアドレス)

